第４７集
令和５年度　実践記録集

学啄

岡崎市立生平小学校

はじめに

「岡崎に飛来する水鳥を、数の増減、営巣場所、餌などをもとに、『都市利用種』『都市適応種』『都市忌避種』に分類してみました。水鳥に都市利用種は、いませんでした。カワセミのような都市適応種には、冬鳥から留鳥になったハクセキレイ、温暖化の影響で数を増やしているトモエガモ、鉄塔も巣に利用するアオサギ、護岸工事で魚が捕りやすくなったカワウなどでした。しかし、一番多いのは都市忌避種でした。数を減らしている鳥が多いということです。都市忌避種は、開発が進むことで、自然がこわされ、すみかがなくなっています。さらに、生態系が崩れてしまいます。生態系は食物連鎖や相互利用の関係などが複雑に積み重なり、絶妙なバランスの下で成立しています。だから、野鳥の観察を続けて、今の状態を把握し、そのうえで自然を守っていく必要があると思いました。」５年生の子供たちは、男川流域で見られるカワセミやヤマセミに着目し、それらの野鳥の実態調査をしながら、環境変化に適応している野鳥とできない野鳥について探究していくなかで、自分たちなりの考えを導きました。

昨年度から「考え、守る」活動として「ふるさと学習」の展開を工夫しています。野鳥調査を入口にして課題を見つけ、その課題解決を通してよりよい自然保護や環境保全について考え、行動していく学習が図れるように単元を構想して実践していくようにしました。その「ふるさと学習」づくりでは、本年度も中京大学の久野弘幸教授と本校元教頭山本典弘先生を招いて、研修会や単元計画の検討会を実施して研修を重ねてきました。先生方一人一人の前向きな研鑽と頑張りのおかげで、昨年度以上に子供たちが夢中になって探究し、ふるさと生平への愛着と共に、野鳥を初めとした自然環境に関心をもち、よりよい環境保全や環境形成に関する考えや思いを高めていく姿をたくさん窺うことができました。それぞれの学年の成長した姿がこの実践記録には綴ってあります。

本年度、サンコウチョウやハヤブサ、ヤマセミなど、普段はなかなか見ることができない野鳥が、本校の創立１５０周年を祝うかのように子供たちの目の前に姿を表してくれました。それは、４０年以上継続して取り組んでいる「ふるさと学習」の賜物であり、よりよい自然保護と環境保全を求めている子供たちの願いに応えてくれているようにも感じました。教職員一同、これからもふるさと生平を愛し、よりよい未来を創り上げていくことができる子供たちの育成を目指して、「ふるさと学習」の創造と展開を図り、教職員一人一人の授業力・実践力を高めていきたいと思います。是非、本書をご覧いただき、ご指導いただければ幸いです。

令和６年３月

岡崎市立生平小学校長　　尾崎　智佳

目　次

はじめに
１　研究の概要　1
２　主題設定の理由
３　研究の方針　2
（１）目指す子供像
（２）研究の仮説と手だて
（３）構想図　3
４　「ふるさと学習」のねらい　4
５　「ふるさと学習」で身に付けさせたい力
６　系統立てた「ふるさと学習」　5
７　研究推進の経過（令和５年度）　6
実践
（１）１年の実践
自然の面白さや不思議さにふれ、興味をもって追究し続ける　8
生活科「みんなであきをたのしもう～おいでよ！あきのおみせやさん～」
（２）２年の実践
学区の人やもの、自然との関りを通して、学区への愛着を深める　12
生活科「はっけん！みんなの生平！」
（３）３年の実践
野鳥と周辺環境の関連を知り、学区の良さを発信する　16
総合的な学習の時間「セキレイのすむ町　すてきな生平」
（４）４年の実践
主体的に追究するなかで、生物の共存について考え、行動する力を育む　20
総合的な学習の時間「ツバメとの共生」
（５）５年の実践
生平の自然環境に興味をもち、よりよい環境保全を考え行動する力を育む　24
総合的な学習の時間「守ろう！生平の町　～男川環境プロジェクト～」
（６）６年の実践
学区の良さを多面的に発見し、主体的に行動する力を育む　28
総合的な学習の時間「ＮＥＷ探鳥会へ行こう！！　～人も鳥も集まる美しい生平へ～」
（７）愛鳥委員会の実践
愛鳥活動のリーダーとなり、活動を活性化させる　32
委員会活動「知る・守る・広げる・つなげる～野鳥がすみ続ける生平を目指して～」
８　成果と課題
（１）本年度の成果　35
（２）今後の課題
おわりに

研 究 主 題

身近な環境に主体的に関わり、よりよい環境について考え、行動できる子供の育成

～愛鳥活動を窓口にした環境総合カリキュラム（ふるさと学習）の取り組みを通して～

１　研究の概要

生平小学校は、岡崎市のほぼ中央に位置する全校 54 人の小規模校である。学校の周囲には標高 200～400m程度の山々が連なり、矢作川水系の男川が、学区を東西に横断して流れている。周辺の山には、植林されたスギやヒノキの人工林とともにコナラやカシなどの自然林も多く残されており、恵まれた自然環境の中で、子供たちは学校生活を送っている。このような特色を生かした教育活動として、本校では『ふるさと学習』を展開している。これは、愛鳥活動・野生生物保護活動を活動の中心として、自ら進んで追究する子供、地域の「人・もの・こと」にふれ、「ふるさと生平」に愛着をもつ子供を育成することを目的に、昭和 52 年度に始められた。

愛鳥活動では、「知る」「守る」「広げる」「つなげる」の４つの「る」を合言葉にして、野鳥をもっと大好きになって、野鳥をもっと守っていきたいと思える活動を行っている。「知る」活動では、野鳥にふれあい、野鳥について調べたり、見つけたりしている。「守る」活動は、生活科・総合的な学習の時間で「ふるさと学習」の探究過程を大切にして、子供たちが愛鳥活動を窓口にし、よりよい環境保全や環境形成について考え、行動していく「考え、守る」活動を行っている。「広げる」活動は、愛鳥委員会が中心となって学年や学校の取り組みを他学年や保護者、地域へ発信する活動である。そして、「つなげる」活動は、野鳥を守るために人と人を繋げていくこと、未来へと繋げていくことが大切だと考え、取り組んでいる。これらの取り組みが認められ、本年度は「愛知県野生生物保護実績発表大会」において、愛知県知事賞を受賞した。さらに「全国野生生物保護活動発表大会」において、文部科学大臣賞を受賞することができた。愛鳥活動を窓口とした本研究の推進を通して、野生生物や自然環境を大切にする心、ふるさと生平を愛する気持ち、そして、よりよい自然保護や環境保全を目指して行動できる力を身に付けたいと考えている。

２　主題設定の理由

朝学習のウォッチングカードや野鳥検定の積み重ねにより、６年生になると 50 種程度の野鳥の声を聞き分け、探鳥会でも一目見て野鳥の名前が出てくる。そのため、野鳥愛や野鳥を守っていきたいという意識はとても高い。しかし、野鳥と自然環境との関係や人間の生活との関わりなど、背景にある要因や環境変化などにあまり考えが及んでいない現状があった。

SDGｓが叫ばれ、学校教育においても持続可能な自然環境の形成や社会づくりについて考え、行動していくことができる子供の育成が求められている。本校においても、単なる野鳥調査や野鳥保護で終わるのではなく、愛鳥活動を窓口にして、野鳥調査から自然環境や人間の生活との関わりを見つめ、持続可能な自然環境を目指して、よりよい自然保護や環境保全のあり方について考え、行動していく「ふるさと学習」を創っていきたいと考えた。

そこで、研究主題を「身近な環境に主体的に関わり、よりよい環境について考え、行動できる子供の育成」、副題を「愛鳥活動を窓口にした環境総合カリキュラム（ふるさと学習）の取り組みを通して」と設定し、研究実践を進めていくことにした。野鳥や自然を題材にして、野鳥の調査や自然体験からよりよい環境のあり方について考えを深め、地域の自然環境の未来に思いをよせ、自分たちができる環境保全に取り組む子供を育てていきたいと考えた。

３　研究の方針

（１）目指す子供像

研究主題を達成するために、目指す子供像を次のように設定した。

○　ふるさと生平に愛着をもち、生平の自然や文化、伝統などの事象に課題を見つけることができる子供
○　自ら進んで追究し、ふるさと生平について深く考えることができる子供
○　ふるさと生平の現在や将来に思いをよせ、持続可能な社会の実現に向け、主体的に行動できる子供

（２）研究の仮説と手だて

【生平小学校のふるさと学習の基本的な単元づくり】

仮説１　ふるさと学習の始まりに、①愛鳥活動を軸とした体験活動・調査活動の位置づけや②教材との出合わせを工夫すれば、生平の自然や文化、伝統などの事象に目を向け、ふるさと生平に愛着をもち、それらの事象に課題を見付けることができるだろう。

手だて１　愛鳥活動を軸にした体験活動の位置づけ
・ターゲットバードの観察・調査から始まる授業づくり

手だて２　教材との出合わせの工夫
・鳥の〇〇について調べていきたいという思いを強くもてる場面の工夫
・鳥の様子や状況からふるさと生平の自然や文化、伝統などの事象に思いを向けるような教材の工夫

【学びを深める授業過程の工夫】

仮説２　ふるさと学習の、③学年テーマについて深い考えがもてる探究課題を示し、④子供自身で課題の解決を図っていける「調べる・考える」活動を行えば、自ら進んで追究し、ふるさと生平の環境について深く考えることができるだろう。

手だて３　子供の「問い」や「思い・願い」を引き出し、課題意識をもたせる工夫
・「知る」活動の根拠を考えたり比較したりして子供の気付きや発言などをつないで焦点化した学習課題の設定

手だて４　子供の思いを活かした個別追究や全体共有の場の位置づけ
・学年の課題解決に向けて、子供の～したいが高まる個別課題の設定と追究
・情報の共有や現状把握・分析をする全体の場の設定

【社会的発信活動の場の設定】

仮説３　ふるさと学習の追究過程や単元の終わりに、⑤地域社会で活躍する講師を活用し、⑥学んだことを発信したり、表現したりする活動の工夫をしていけば、子供たちはふるさと生平の現在や将来に思いをよせ、よりよい環境について考え、主体的に行動できるだろう。

手立て５　地域社会で活躍する講師の活用
・地域社会で活躍、環境のために取り組んでいる地域ボランティアや講師の活用
・調べたことに関する専門的な知識を教えてもらったり、助言をしてもらったりする活動

手立て６　単元の後半に学んだことを発信したり、表現したりする活動の工夫
（持続可能な社会の担い手として自分たちができることを伝える場面を設定）
・ふるさと学習まとめ発表会での工夫
・学んだことをもとにした地域社会への発信活動や行動化の工夫

（３）構想図

目指す子供像

○　ふるさと生平に愛着をもち、生平の自然や文化、伝統などの事象に課題を見つけることができる子供

○　自ら進んで追究し、ふるさと生平について深く考えることができる子供

○　ふるさと生平の現在や将来に思いをよせ、持続可能な社会の実現に向け、主体的に行動できる子供

生平の人・もの・こと

地域発見学習

生平ふるさとカルタ学習
生平地づき唄学習
生平の郷土劇
昔遊び体験
田植え稲刈り体験
学区探検

生平の自然

学年別課題解決学習

校内の野鳥調査
学区の野鳥調査
セキレイの分布調査
ツバメの営巣調査
男川での生物調査
学区の探鳥コース作成

生平の野鳥

愛鳥活動

縦割り親子探鳥会
野鳥検定
ふるさと学習テーマ発表会
ふるさと学習まとめ発表会
給餌活動
裏山での野鳥観察

関係諸団体・諸機関

学習に対する協力・支援

生平学区のお店
公共機関・施設
地づき唄保存会
老人会（富士クラブ）
岡崎市動物総合センター
市中山間政策課、県環境部
岡崎市野鳥の会

学校行事　教科学習

教科横断的

ふるさと学習

愛鳥委員会

愛鳥活動の推進

探鳥会の企画運営
ウォッチングカードの推進
各種発表会への参加
愛鳥新聞の作成
野鳥検定の対策プリント作成
アルミ缶回収の企画運営
裏山給餌活動の企画運営

「ふるさと学習」で身に付けたい資質・能力

○知識及び技能　○思考力・判断力・表現力等　○学びに向かう力・人間性等

研究の課題

地域文化や伝統の継承と創造
主体的な学びの構築
思考力・判断力・表現力の育成
SDGsの推進

児童の実態

純朴で素直
自然に対する関心が高い
自分の意見を主張するのが苦手

保護者・学区の願い

伝統ある愛鳥活動の継続
地域の人々との関わり
命を大切にする心の醸成
持続可能な社会の実現

４　「ふるさと学習」のねらい

子供たちが、野鳥を含めた生物のための環境保全活動の必要性を感じ、ふるさと生平の素晴らしさに触れられるようにしたいと考え、地域の「人・もの・こと」を教材化し、生活科・総合的な学習の時間と教科・領域とを横断的に関連させた学習を「ふるさと学習」として設定した。ねらいは、以下に示す通りである。

- 地域の自然、文化、伝統、歴史、環境、人の生き方などを体験的に学んだり、自ら見つけた問題を解決したりすることができるようにする。
- 子供たちの地域に対する興味・関心や、幅広い問題意識を生かして学習を展開することができるようにする。
- 教科の学習内容と関連させたり発展させたりした学習活動に取り組ませることで、子供たちの興味・関心に沿った効果的な活動を行うようにする。
- 豊かな自然、文化、伝統、歴史や人々の思いにふれることにより、地域のよさを実感できるとともに、生き物にやさしい自然環境を考えたり、よりよい「ふるさと生平」について話し合ったりし、豊かな心を醸成することができるようにする。

５　「ふるさと学習」で身に付けさせたい力

「ふるさと学習」で身に付けさせたい力を学習指導要領に合わせ、３つの資質・能力に整理した。

学年	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
低学年	野鳥や虫、草花について見つけた疑問を、人に聞いたり、図鑑で調べたりして解決することができる。	野鳥や虫、草花を絵に描いたり、追究で見つけたことを文に書いたりして発表することができる。	学区の人との関わりや自然に親しむ活動の中から、人や自然との関わりの楽しさに気付くことができる。
中学年	校内や学区の野鳥の分布の様子を調査し、マップにまとめたり、問題解決に必要な情報を収集し、分析したりすることができる。	互いに協力しながら追究活動し、調べたことをまとめて、自分の言葉で説明したり、リーフレットや新聞に整理したりして発信することができる。	自分の課題を意識しながら地域の自然や人との関わりなどを通して、生平のよさに気付き、それらを大切にするために行動することができる。
高学年	数ある情報の中から、自分の課題を解決するために必要な情報を選んだり、専門家を招いて質疑応答したりする中で得られた情報を用いて追究活動することができる。	持続可能な社会の実現について思考し、探究で得た情報を整理し、相手を意識した発表をしたり、広く発信したりすることができる。	これまでの体験をふまえて、これからの生平に必要なこと、さらに世界の中の生平として必要なことを考え、周囲に働きかけたり、自ら実践したりすることができる。
活動の様子	 2年　学区の野鳥マップ作り	 5年　竜谷小学校にて交流	 6年主催縦割り親子探鳥会

６　系統立てた「ふるさと学習」

学年	テーマ	目　　標	ターゲットバード	その野鳥を取り上げる教材の価値
１年	学校の自然や人を好きになる	学校の野鳥や動植物を自分の目で見つけたり、名前を覚えたりする活動を通して身近な自然に親しみ、成長や命への関心を高める。	学校の鳥	学校に飛来する野鳥すべてにすることで、上級生と関わりながら身近な野鳥を知り自然に興味をもつことができる。
２年	学区の自然や町を好きになる	学区の町探検等の活動を通して疑問に感じたことについて、観察をしたり調べたり聞いたりして、生平の町のよさに気付く。	学区の鳥	学区に飛来する野鳥すべてにすることで、学区の人と関わりながら多くの野鳥を知り学区に興味をもつことができる。
３年	生態の変化	自然環境や生態の変化について理解・考察し、よりよい自然環境の関わり方について発信したり、自分ができることを行ったりする。	ハクセキレイ セグロセキレイ キセキレイ	３種類のセキレイから生態の違いや変化について考えることができる。
４年	生物の共存 人間との共生	生物の共存や人間との共生について理解・考察し、よりよい自然環境の関わり方について発信したり、自分ができることを行ったりする。	ツバメと スズメ	スズメがツバメの巣を使ってしまう実情やツバメの飛来の変化の実情から生物同士の共存や人間との共生のあり方について考えることができる。
５年	環境保全 生態系維持	生態系維持や環境保全のあり方について理解・考察し、よりよい環境保全について発信したり、自分ができることを行ったりする。	カワセミ ヤマセミ アカショウビン	男川河川域で見られる野鳥の実情や生息域の変化から、生態系の維持や環境保全のあり方について考えることができる。
６年	環境共創 自然と社会との調和	自然と社会（人間）との調和を踏まえた環境づくりについて理解・考察し、よりよい環境保全や環境形成について発信したり、自分ができることを行ったりする。	マイターゲットバード（学区の野鳥から個による選定）	多種多様な野鳥を見ることができる生平学区の豊かな自然環境を題材にして、自然と社会（人間）との調和を踏まえた環境（地域の活動）づくりについて考えることができる。

７　研究推進の経過（令和５年度）

○　４月２２日　研究推進全体会①

〈内　容〉　確かな学力を身に付け、楽しく分かる授業づくりについて

・指導案作りのポイント

・生平式分かる授業づくりの学習スタンダード作成に向けて

研究主題と環境総合カリキュラム（ふるさと学習）づくりについて

・学年テーマと探究課題について

・単元計画づくりのポイント

○　６月１２日　指導主事訪問

〈内　容〉　１年：生活科「おおきくなあれ」

２年：算数科「たし算とひき算のひっ算（１）」

３年：社会科「学校のまわり」

４年：特別の教科　道徳　主題　より遠くへ－谷真海－

５年：理科　「植物の発芽と成長」

６年：国語科「風切るつばさ」

かわせみ：自立活動「どんなことに気をつけて、声かけができるといいのかな」

やませみ１：算数科「たし算とひき算のひっ算（１）」

やませみ２：自立活動「自分でできるコグトレ」

〈訪問者〉　青木　貴之　児童生徒支援係長　　高橋　崇子　指導主事

〈指導内容〉発問の内容、声や表情がよい。根気よく子供の発言を引き出していた。

授業でまとめと振り返りを大切にしてほしい。今日の学びはどうだったか、何を身に付けたのかを振り返られるようにしたい。

○　６月１５日　国語科指導員訪問

〈授業者〉　岡　千晴　教諭　　６年国語科「風切るつばさ」

〈講　師〉　高橋　遼　先生

〈指導内容〉どう学ぶか、何をやったらいいのかが分かるように最初の見通しを丁寧に行うと良い。「聞くこと」を大切にすると、話し合いが活発になっていく。国語科は言葉による見方、考え方を働かせていく必要がある。

○　６月２４日　ふるさと学習テーマ発表会

○　７月２０日　研究推進全体会②

〈内　容〉　ふるさと学習の構想

研究のまとめ「啐啄」について

単元づくりの話し合い

○　８月　３日　愛知県野生生物保護実績発表大会

〈内　容〉　守ろう！野鳥がすみ続ける「ふるさと生平」（愛知県知事賞受賞）

○　９月１１日　研究推進全体会③

〈内　容〉　「調べ、考える」２学期のふるさと学習について

研究のまとめ「啐啄」について

単元づくりの話し合い

○　９月１４日　**図画工作科指導員訪問**

〈授業者〉　小久保　優樹　教諭　　３年図画工作科「ねん土ランドへようこそ」

〈講　師〉　中根　勅子　先生

〈指導内容〉図画工作科で学びを深めるためには、自分の思いと人の思いを作品に取り入れていく必要がある。友達のよさを取り入れさせたいときには、着目させたいポイントを与えておき、新しい視点をで自分の作品を見直すことができるようにするとよい。

○　９月２５日　**現職教育研修（ふるさと学習の進め方について）**

〈授業者〉　全学級（生活科・総合的な学習の時間）

〈講　師〉　山本　典弘　先生（むつみみやこ幼稚園長）

〈指導内容〉どうする？「主体的な学び」、どうする？「対話的な学び」、どうする？「深い学び」研究として難しい表現を先生自身の分かりやすい表現におとして子供たちに指導できるように「先生の学びを学級ごと（自分ごと）として捉え、子供への指導内容を「仕組む・仕掛ける」ことで子供がより興味関心を示し主体的・対話的で深い学びにつながっていく。

○１１月１０日　**現職教育研修（調べをもとに、新たな問いをもたせる授業づくり）**

〈授業者〉　杉本　智恵　教諭　総合的な学習の時間

「守ろう！生平の町～男川環境プロジェクト～」

〈講　師〉　久野　弘幸　先生（中京大学）

〈指導内容〉子供の意見から第２課題を作っていくためには、意味のある話し合いが必要である事実や根拠を大切にして、場所のイメージを具体的な言葉で語ることができる子供にする。そして、子供の思考を板書で分かりやすく整理をして、分析ができるような工夫をする

○１２月１９日　**研究推進全体会④**

〈内　容〉　３学期　研究の視点

研究のまとめ「啐啄」について

○　１月１８日　**学校図書館指導員訪問**

〈授業者〉　横山　景一　教諭　　４年社会科「おかざき学習」

〈講　師〉　近藤　秀子　先生

〈指導内容〉学校図書館には、読書センター、学習センター、情報センターの役割がある。教師が話してしまいそうなことを、資料を見せて子供たちに考えさせることができる。

○　２月　９日　**ふるさと学習まとめ発表会**

〈内　容〉　各学年のふるさと学習で学んだことの発表

愛鳥委員会の実践報告、「ふるさと生平」愛鳥宣言 2024

〈講　師〉　河合　美智代　先生

〈講演内容〉各学年の実践に対する指導

○　３月下旬　　**実践記録集「啐啄」発刊**

実　践

全校校外学習（２月２９日　岡崎公園）

１年の実践　自然の面白さや不思議さにふれ、興味をもって追究し続ける

生活科「みんなであきをたのしもう～おいでよ！あきのおみせやさん～」

子供の実態

・あさがおの生長や木の実の成熟を楽しみに観察したり、野生の鳥や虫などに出会ったことを楽しそうに話したりすることができる。
・生活科や野外活動が好きで、いろいろなことに興味をもって活動できる。
・やりたいことに積極的に取り組むが、やりたい気持ちが強すぎて先走り、失敗することがある。

教師の願い

豊かな自然の面白さを感じながら、季節の移り変わりに気付き、積極的に自然と関わって活動していくことができるようにしたい。学校の自然や人など、たくさんのすてきなものを見つけ、愛着心を育みたい。また、一人で探究していくだけでなく、友達と関わり探究していくことの楽しさも感じてほしい。

単元目標

① 五感を使って自然と関わることで、自然の面白さや季節の変化に気付く。
② 秋の身近な自然を生かした遊びを考えたり、友達と関わり合いながら、遊びに使うものを工夫したりして、自然への興味を高める。
③ たくさんの自然を集めたり遊び方を考えたりして、自分の生活を楽しくしようとする。

教材観

学校裏山はたくさんの野鳥、昆虫、植物などが生活し、季節ごとの良さを感じることもできる。秋にはたくさんのどんぐりや色とりどりの落ち葉が採取できる。見る、聞く、触るなどの様々な感覚を使って、これらの自然物に繰り返し関わる。その過程では、どうしたらどんぐりゴマを上手に回せるか、落ち葉を使ってどんな遊びができるかなどの思考が巡る。それらを繰り返すことで、秋の自然物や遊びが自分にとって特別なものになる。また、友達と関われば、自分の考えだけでなく視野を広げて考えたり、協力して作ったりすることができ、熱中して取り組むことができる教材である。秋に見つけたお気に入りを使った遊びを通し、裏山の自然から楽しさや面白さを感じることで、ふるさと生平への愛着を深めていく。

指導観

生平小学校にある秋のお気に入りを見つけ、各自のタブレットに写真を撮ったり、集めたりする。お気に入りを集めることでオリジナル度が高まり、興味をもって取り組むことができる。また、自然のものを使って遊ぶことは楽しいと感じ取ることができるようにしたい。そのために、いろいろな遊びを考え、その中から一人一店、秋のお店屋さんを開店する。交代でお店屋さんとお客さんの両方を経験することで、どうしたらお店に来てくれた人に楽しんでもらうことができるか、そのためにお店をさらに工夫することができないかと考える。その後、就学時検診で保育園の子たちに披露する場を設ける。保育園の子たちと実際に触れ合い、会を成功させることで、「できた」という実感をもたせ、自分自身の成長への気付きを確かなものとしたい。また、発展として、２年生を招待したり、全校のみんなで遊ぶ全校レクを開催したりするところまで学びを深めていくことができればと考える。

目指す子供像

・裏山の自然、季節の変化に関心をもち、自ら進んで追究していく力のある子供。
・自然や人と関わりながら、学びを深める子供。

単元計画「おいでよ！あきのおみせやさん」（２１時間完了）

〇あきを見つけよう

・運動場や裏山で諸感覚を使って秋を見つけたり、楽しんだりして秋に親しむ①～③

・たくさん回るどんぐりごまをそれぞれ追究して作る。④～⑤

・いろいろな遊びを考えて試してみる。⑥～⑧

〇おいでよ！あきのおみせやさん

・保育園の子に秋の自然物を使って遊ぶお店屋さんを開いて遊んでもらう。⑨～⑫

・学年ごとに順番に全校のみんなに遊んでもらう準備をしよう。⑬～⑯

・３年、２年、５年、６年、４年の順にお店屋さんに招待しよう。⑰～㉑

実践の様子Ⅰ（①～⑧）

秋の探検では、運動場や裏山を中心に、木の実や落ち葉、花などの植物や、鳥や虫などの生き物に目を向けて、お気に入りを見つけた。そして、タブレットで写真を撮り、写真を見ながらお気に入りカードにかき、秋のマップに貼るという活動を行った。マップ作りは、春・夏と続けてきているので、見つけた場所が校舎の地図のどのあたりになるのかを考えて自分で貼ることができた。

どんぐりごまを回してよく回るこまを試作する子供たち

また、探検中に見つけたどんぐりや栗の実を拾って、教室に持ち帰った。学校で拾ったどんぐりの中でも、形や大きさが異なるものがあり、それぞれの家の近くに落ちているどんぐりを拾ってきて、みんなで比べた。どんぐりにもいろんな種類があることに子供たちは気付くことができた。どんぐりごまを作って遊びたいという意見が出たため、早速作ってみることにした。作ったどんぐりごまを回してみると、長く回るものとそうではないものがあった。それぞれが追究して長く回すためには何を改良すべきか考えて、いろいろ試す時間を取った。回し方やどんぐりの大きさ、爪楊枝の長さやさし方など、いろいろ変えてみて、自分なりのよく回るどんぐりごまを作ることができた。

考えた遊びを実際に試してみる子供たち

また、裏山に何度も探検に行くにつれて、どんぐりを集める子供だけではなく、まつぼっくりや栗の実を見つけて拾ってくる子供、イチョウ、モミジの葉っぱなどを気に入って集める子供、ツバキなどのきれいな花を集める子供など、それぞれのこだわりが出てきた。そこで、どんな遊びをやってみたいか考えて試してみることにした。考えた遊びを１人ずつ発表すると、オナモミダーツ、まつぼっくりけん玉、どんぐりの人形作り、宝探しというアイデアが出てきた。１人はどんぐりごまを作ったのが楽しかったから、もっとやってみたいという考えだったので、全部で５つの遊びが揃った。そこで、遊びに使う材料を用意して、実際にやってみることにした。５人でそれぞれの遊びを試してみたことで、秋の探検で見つけた物を使った遊びの面白さ、友達に遊んでもらうことの楽しさを味わうことができた。

実践の様子Ⅱ（⑨～㉑）

就学時検診があることを伝えると、自分たちが考えて試した遊びをもっとよくして、昨年自分たちがやってもらったように、保育園児たちにお店屋さんを開いてもてなしたいという意見が自然と出てきた。１年生は５人、保育園児たちは９人であったので、考えて試していた５つのお店をそのまま担当することにした。そして、もう一度、子供同士でお店屋さんごっこをし、それぞれのお店に良かったところや、もっと良くできるところをアドバイスし合うことでまた、お店を改良することができた。

保育園の子に「秋のお店屋さん」を開いた様子

就学時検診の日に、保育園児に秋のお店屋さんを開くと、「説明をするのが難しかった。」という意見はあったが、「楽しそうに遊んでくれたのが良かったから、もっとやってみたい。」「去年、お店屋さんをやってくれた２年生も呼びたい。」という意見が出てきた。さらに、「集めたどんぐりやまつぼっくりがいっぱいあるから、２年生だけでなく、６年生とかお兄ちゃんがいる３年生とかみんなに来てももらいたい。」という意見も挙がった。そこで、２～６年の各学年を１日ずつ招待することになった。２～６年の人数が４９人なので、４９人分の材料と賞品の準備がいることを伝えると、少し不安そうな様子もあったが、開店日が少しずつ間が空いているので、その間に作ればいいことが分かると、「みんなでやればできるよ。」「賞品を作るの、手伝ってあげるよ。」と、みんなで協力してお店屋さんを開くことを決めた。そして、それぞれの学年をふれあいタイムに招待して、自分たちが準備したお店屋さんで楽しく遊んでもらうことで、達成感を味わうことができた。

５年生が「秋のお店屋さん」に遊びに来てくれた様子

成果

春、夏、秋、冬と一年を通して生平小のお気に入りを見つけてマップを作る活動を続けてきたので、五感を使って探検をし、見つけたお気に入りをタブレットで撮影し、教室に戻ってカードにかいてマップに貼るという活動が定着できた。春、夏、秋、冬の４つのマップができたので、並べて比べると、四季の変化により、見られる植物や鳥や虫などの生き物が変化していることがよく分かるものになった。裏山には季節ごとにすてきな宝物があり、鳥もたくさん集まり、自分たちのお気に入りの場所だということを感じることができた。

また、秋のお店屋さんの活動は、保育園児、２～６年と全部で６回も開店することができたので、接客の仕方もだんだんと上手になり、自分から進んで「お店に来てください。」とお客さんに声を掛けたり、お店での遊び方の説明が分かりやすくなったりと上達していった。

課題

全校児童にお店屋さんで遊んでもらいたいという子供たちの願いを叶えるために、各学年の先生と打ち合わせて日程調整をした。だが、拾ってきたどんぐりはだんだんと痛んできて、どんぐりごま屋で、どんぐりに爪楊枝を指す穴を開けると、割れてしまうようになった。１１月中旬には、学校のどんぐりがなくなってしまったので、１２月に招待した学年用のどんぐり集めに苦労することになった。１年生の人数が多ければ、２学年ずつまとめて招待し、１１月に集中して遊ぶとよいと思った。

	ふるさと学習（１年生）　50 時間　生活科	他教科との関連
4 月 5 月	○がっこうとなかよし ・６年生と探鳥会 ・校舎内の施設や人について知る ・裏山へ行き探鳥会やウォッチングカードの書き方を覚える	○学校探検 ・がっこうだいすき（道徳） ○テーマ発表会 ・愛鳥を描こう（図工） ・発表練習（国語）
6 月	○縦割り親子探鳥会①（１） ○いきものとなかよし ・鳥について知る ・春のお気に入りマップ ○ふるさとテーマ発表会（１）	
7 月	○はなややさいとなかよし ・校内にある花を使って押し花や色水遊びなどをする ・夏のお気に入りマップ	
9 月	○縦割り親子探鳥会②（１） ○なつとなかよし ・裏山に来る生き物を見たりつかまえたりする	○なつとなかよし ・押し花のしおり作りや色水の絵遊びをしよう（図工）
10 月 11 月	○あきとなかよし ・秋になって変わったことを見つける ・裏山の虫、木の実、落ち葉などを知り、親しむことと、おもちゃの作り方や遊び方を工夫しながら、みんなで楽しく遊ぶ ・秋のお気に入りマップ	○あきのたからもの ・探検に行って見つけたものを発表しよう（国語） ・絵日記をかいて振り返ろう（国語）
12 月	○縦割り親子探鳥会③（１） ○ふゆとなかよし ・冬になって変わったことや冬を見つけて、伝え合う ・冬のよさを見つけ、おもちゃやのつくり方や遊び方を工夫したり、クイズを作ったりしながら、みんなで楽しく遊ぶ ・冬のお気に入りマップ	○ふゆのアルバム ・絵日記を描いて振り返ろう（国語）
1 月	○校外学習（４）	
2 月	○縦割り親子探鳥会④（１） ○ふゆとなかよし ・お正月の遊びや伝承遊びを、地域の人に教わりながら、工夫して遊ぶ ・風で動くおもちゃを作り、工夫して遊ぶ	○おもちゃ遊び交流会 ・富士クラブさんたちに昔遊びを教わろう（道徳）
3 月	○ふるさとまとめ発表会（１）　○縦割り探鳥会⑤（１） ○はるをさがそう ・春を見つけると同時に１年間の四季を振り返る	○まとめ発表会 ・まとめ発表会の練習をしよう(国語)

２年の実践　学区の人やもの、自然との関わりを通して、学区への愛着を深める

生活科「はっけん！みんなの生平！」

子供の実態

・昨年度、四季を通して学校の裏山や野鳥の森と関わり、校内の自然環境に愛着をもっている。
・野生の鳥や動物と出会った事を楽しそうに話す。
・好奇心が強く、楽しんで活動し、思いを伝えようとする。
・学区にどのようなお店やものがあるのか、詳しく知っている子が少ない。

教師の願い

生平学区の人、もの、店、公共施設、自然など様々なもの、事象に興味関心を抱き、ふるさと生平を愛する気持ちを育ませたい。

学区にあるお店で働く人々や学区で暮らす人々の思いに触れることで、自分たちの生活は様々な人に支えられていることに気付いてほしい。また、自分たちには学区のために何ができるのか考えてほしい。

単元目標

① 学区の人々の思いに触れることで、多くの人に支えられていることに気付いている。
② 学区の自然や歴史に触れることで、魅力に気付いて愛着を深めようとしている。
③ 町探検で学んだことや発見したことをまとめて、発表しようとする。

教材観

本学級の子どもたちは、昨年度、学校の裏山を中心に、生きものや自然と触れ合う活動を行った。その結果、子どもたちは学校の裏山に対して、愛着を持つことが出来た。２年生では、活動範囲が学校から、学区全体へと広がり、そこで働く人々や暮らしている人々の思いに触れ、自分はそういった人々に支えられていると実感することができる。また、学区について知識を深めることで、地域に親しみや愛着を持つことが出来るようになると考える。

指導観

子供の思いや気付きから学びを始めるために、家から学校までの地図を描いて自分の住む地域の様子や学校までの道で見つけたものをふり返り、自分のお気に入りの場所や行って見てみたいところについて話し合う。子供の興味関心に沿って見学の計画を立てる。その際、野鳥の見られるところ、お気に入りの遊び場などからお店や施設にも視野を広げていく。探検に行く前には、見たいことや知りたいことはどんなことか、目的を明確にし、店や施設の見学には質問を用意させることによって、見学への意欲を高める。また、店の方と事前に打ち合わせ、可能ならば体験を取り入れる。店や施設では、見学時間を十分にとって、体験や質問を通して学区の方と関わり、その思いに迫れるようにする。探検後には、自分たちが見つけた学区のよさを、写真や絵、地図などを使って他学年や地域に発信していく活動へつなげる。

この活動を通して、学区には野鳥が暮らす自然があり、温かい方たちがいて自分たちを支えてくれていることに気付き、より愛着をもってほしい。

目指す子供像

・ふるさと生平に関心を持ち、「なぜ」「どうして」など疑問を大切にしながら、自ら進んで追究していく力のある子供。
・学区で働く人々、暮らしている人々と関わり合いながら、それらの繋がりを大切にできる子供。

単元計画「はっけん！みんなの生平！」（２５時間完了）

〇家から学校までの地図を作ろう①～⑤

・通学路にどんなものがあるか思い出し、家から学校までの地図を作成する。

・地図について家から学校までの道のりを説明し、学区に対する関心を高める。

〇町たんけんで見てみたいもの、聞いてみたいことを考えよう⑥～⑩

・町探検で行く店や施設について何が知りたいのか考える。

・お店や施設への質問と、それに対する自分なりの予想を考える。

〇町たんけんへ行こう⑪～⑮

・昭和堂

・橋本屋、河合郵便局、ロッキーカフェ、駐在所

〇町たんけんではっけんしたことをまとめよう⑯～㉕

・発見したものや、聞いたこと、町探検を通して思ったことを共有する。

・写真や文章を使って、お店や施設の紹介したいことをスクールタクトにまとめる。

実践の様子Ⅰ（①～⑩）

子供たちが、どの程度学区について知っているのか把握するために、学区にある店について問いかけると、学校の周りや自宅の近くにある施設や店舗の名前を挙げ、友達が住んでいる地域にある店舗や施設について知っている子は、少なかった。また、同学年で住んでいる子が誰もいない築野地区について、詳しく知っている子はほとんどいなかった。そこで、学区に目を向けるために、まずは通学路に注目し、自宅から学校までの地図を作成した。友達の家やお店などの人が作ったもの（たてもの・おみせ）と野鳥などの生き物や植物（しぜん）の２つのジャンルに分け、「２つとも地図に描き込むことができるといいね。」と声をかけた。「家の裏に柿の木があるよ。」「金魚を飼っている家があるよ。」「ここにお店があるよ。」などと言って地図に描きこみながら活動を進めていた。自分が作成した地図を全員に見せながら、通学路について説明した。子供たちは、友達の発表を聞いて、学区について新たな発見をすることができたようであった。また、普段何気なく使っている通学路でも、改めて振り返ってみることで、様々なものがあることに気付くことができていた。

子供が作成した地図

通学路の地図を作成し、友達に紹介する活動を通して、子供たちの、学区についてもっと知りたいという気持ちを高めることができた。

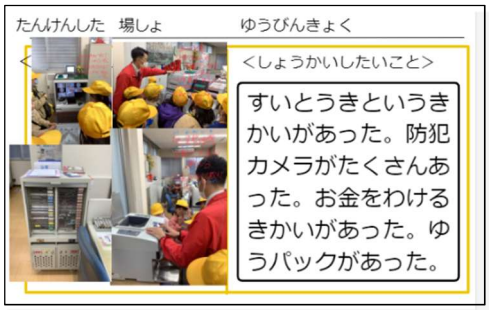
学区への関心が高まったところで、町探検で見学する店舗や施設への質問の内容について考えた。今年は、昭和堂、橋本屋、河合郵便局、茅原沢警察官駐在所に加えて、築野地区にあるロッキーカフェを新たに見学できることになり、子供たちは、どのようなお店なのか強く興味を抱いている様子であった。質問の内容については、始めは、それぞれの店舗の商品やメニューについての質問が多かった。しかし、授業を進める中で「お店はいつから、なぜ始めましたか。」など歴史的な背景について目を向ける子、さらに「手紙は他の国まで届けることができますか。」など世界にまで目を向ける子もおり、店舗や施設の秘密について様々な角度から迫ろうとする姿が見られた。

実践の様子Ⅱ（⑪～⑱）

昭和堂でのおまんじゅう作り体験に加えて、警察官の盾や無線機などの装備品を触ったり、普段は入ることができない場所に入らせていただいたりと貴重な体験をすることができた。また、ロッキーカフェでは、コーヒー豆を試食させていただくなど、五感を使って探検をすることができた。特におまんじゅう作り体験は、昭和堂の榊原さんのぜひ子供たちに体験させてあげたいという強い思いから実現することができた。そのおかげで子供たちは、体験を通して和菓子作りの工程や使う機械について楽しく学ぶことができた。また、自分の技術と昭和堂の榊原さんの技術を比べ、「いつの間にかにおまんじゅうが何個もできあがっていた。」と話し、複雑な工程を短時間でこなしていく榊原さんの高い技術力に驚いていた。

ロッキーカフェで車のエンジンルームを見る子供たち

どの店舗や施設でも必ず子供たちの質問に答えていただく時間を設定することで事前に考えてきた質問や見学を通して出てきた疑問などを積極的に質問する姿が見られた。町探検に行く前に、事前に質問を考え探検を行うための視点を持つことができていたため、学校に戻って来てからの振り返り活動では、それぞれの視点から発見したことについて共有することができた。橋本屋がいつ始まったのか疑問を持っていた子は、質問を通して 109 年前からお店が始まったことを知り、1923 年からお店が始まったことを算出することができた。



紹介したいことについて子供がまとめたスクールタクト

学校で、それぞれが発見したことについて振り返り活動を行った後、子供たちは、１年生や６年生など他の学年に、あるいはお家の人など学校の外の人たちに紹介したいという思いをもった。そこで、町探検を行った店舗や施設について紹介するため、スクールタクトを用いて写真や簡単な文章でまとめた。「１年生に紹介するなら、来年町探検に行くから紹介しすぎないようにしよう。」など実際に紹介する相手のことを想定しながら、まとめることができる子もいた。町探検を通して発見したことを、子供たちの視点でスクールタクトにまとめていく活動を通して、学区の魅力に気付き大切にしようとする思いを育むことができた。

成果

築野地区を中心に探検を行ったことで、子供たちは学区について認識を深めることができた。探検後に子供が、「橋本屋で買い物をしたよ。」などと話しており、探検した店舗や施設を利用し、生活に活かす姿が見られた。店舗や施設を紹介したいという思いの発現を通し、学区への愛着の高まりを感じることができた。

課題

インフルエンザの感染拡大による学級閉鎖などの影響もあり、見学を予定していた店舗の見学ができない事態が発生した。学期末が迫っていたこともあり、代替の日程で実施することもできなかった。今後もこのような事態が発生することが予測されるため、遅くとも１０月上旬頃までには、各店舗や施設の方々と連絡を取り、探検の日程を組んでいく必要があると感じた。

ふるさと学習（２年生）　50 時間　生活科

		他教科との関連
４月 ５月	○春　はっけん ・１年生に学校案内をする ・春から夏にかけて気付いた学区の人やもの、自然について、シールを作り、学区のマップに貼る（4 月～9 月） ○縦割り親子探鳥会①（１）　○ふるさと学習テーマ発表会	○春　はっけん ・２年生になって（道徳） ・発表練習（国語） ・紹介します道徳） ・たんぽぽ（国語）
６月 ７月	○生きもの　はっけん ・育てたい野菜を考えて夏野菜を育てる ・観察記録をのこす ○春の町はっけん ・野鳥や虫などの生きものを見つけに築野へ探検に行く ○縦割り親子探鳥会②（１）	○生きものはっけん ・観察したことを書こう　（国語） ・観察したことを紹介しよう　（書写）
９月 10 月	・育てた野菜を収穫する 自分が知っている、わたしの町をしょうかいしよう ○わたしの町　はっけん ・どこに行きたいのか、どんなことについて知りたいのか考える ・実際に訪問して、新たな発見を見つける ・みんなに分かりやすく発表する ・町探検を通して発見したことについて、写真や文章を使ってスクールタクトにまとめる。	○わたしの町はっけん ・探検に行って見つけたものを発表しよう　（国語） ・絵日記をかいて振り返ろう（国語） ・ありがとうを伝えよう　（国語） ・この人をしょうかいします（国語）
11 月 12 月	○縦割り親子探鳥会③（１） ・秋から冬にかけて気付いた学区の人やもの、自然について、シールを作り、学区のマップに貼る（10 月～3 月） ○縦割り親子探鳥会④（１）	
１月 ２月 ３月	○自分　はっけん ・自分の良いところ、成長したところを知る ・小さかったころからの自分ブックをつくる ・春、夏のマップとのちがいを比べ、学区の人やもの、自然に詳しくなった自分達の成長を知る ○ふるさと学習まとめ発表会（１）　○縦割り探鳥会⑤（１） ・探検でお世話になった人や身近な人にありがとうのカードを届ける ・１年間を振り返り、これからの目標やなりたい自分について考える	○自分　はっけん ・絵日記を描いて振り返ろう（国語） ・まとめ発表会の練習をしよう（国語） ・すきな場所を教えよう　（国語）

３年の実践　野鳥と周辺環境の関連を知り、学区の良さを発信する

総合的な学習の時間「セキレイのすむ町　すてきな生平」

子供の実態

・野鳥のことが好きで観察したいという気持ちが強い子が多い。
・野鳥について、経験から考えることはできても、自発的に調べようとはしない。
・２年生で行った町探検の経験から、学区の人との関わりをうれしく思っているが、受け身である。
・自主的な活動を進めることに不慣れである。

教師の願い

セキレイについて学区の人と調査する活動を通して、学区の自然の豊かさに気付き、その環境を大切に思う気持ちを育みたい。また、他学年や学区の人、外部の人との関わりから、自分の考えを分かりやすく相手に伝える大切さに気付けるようにしたい。

単元目標

①　学区のセキレイ分布の調査をし、問題解決に必要な情報を集めて分析してまとめている。
②　互いに協力しながら探究活動をし、自分の言葉で説明したり、報告文にして発信したりしている。
③　調査や人との関わりから、学区の良さに気付き、学区の人・もの・ことを大切にするための行動をしている。

教材観

セキレイは、学区に多く存在し学校でも見ることができるため、子供たちにとって身近な野鳥である。それゆえセキレイはとても親しみやすく、自分事として学習を進めていくことができると言える。昨年度の３年生もセキレイマップを作成し発表会をしているため、子供たちもおおよその活動の見通しをもって進めることができる。また、ハクセキレイは岡崎市の鳥でもあるので、学区の外へ目を向けやすく、大勢の人にとっても愛着があり身近な野鳥であることに気付くことができる。また、他地域の環境と比較することで、３種のセキレイが生息する学区の良さを実感することができる。

指導観

教室にセキレイマップを掲示し、月ごとの調査結果を比較できるようにすることで、セキレイの生態と学区の地理的環境について考えることができるようにしたい。また、ハクセキレイがどうして市の鳥に指定されているのかその理由を一人一人が考え調べる活動から、セキレイに対する多くの人の思いを知り、三種も見られる生平の環境の良さについて気付くことができるようにしたい。また、富士クラブの人たちの学区への思いに触れることで共に学区を守っていこうとする気持ちを育みたい。

目指す子供像

・身近な野鳥や自然に親しみ、継続観察、追究し続ける子供。
・他学年や学区の人々などと積極的に関わりをもつことで、他者と関わる力を身に付けていくと共に、人との関わりを大切にしていく子供。

「セキレイのすむ町　すてきな生平」
（総合的な学習の時間　３５時間　国語１０時間　理科１０時間　社会５時間）

知る → 調べ、考える → まとめ、広げる

時期	４月～７月	９月～１２月	１月～３月
探究の過程	学区のセキレイの分布を知る（20 時間）	市の鳥がハクセキレイである理由を調べる（30 時間）	セキレイの魅力を全校や地域の方に伝える（10 時間）
課題設定	・生平学区のセキレイを調べよう。	・ハクセキレイは、岡崎市の人たちにどれくらい知られていて、どれくらい愛されているのだろう。	・３種類のセキレイを多くのみんなに知ってもらおう。
情報収集	・セキレイの生態を調べる。 ・学区のセキレイマップを作成する。 ・富士クラブの方や全校児童に協力を依頼する。 ・学区のセキレイ調査をする。 （６月～１月）	・課題を解決するための方法を考える。 ・課題追究をする。 （野鳥の会の資料のデータ分析・アンケート調査・岡崎市史・野鳥の会の方への質問など）	・年間のセキレイマップを整理しデータをまとめる。 ・分かりやすく伝えるためにどんな資料を用意してどんな発表にしたらよいか話し合う。
整理分析	・作成したセキレイマップから、どのセキレイがどんな場所で見られるのか整理する。 ・学区のセキレイマップを図鑑で調べたことと比べて考えをまとめる。	・分かったことを伝え合う。 ・分かったことをもとにさらに追及したいことを調べる。 ・分かったことを生平学区の様子と比べて考えをまとめる。	・収集した情報を整理し、データ化して、以前に比べどのように変化したかを整理し、原因を分析する。 ・自分たちの活動の成果と課題を整理する。
まとめ表現 振り返り	・まとめたことを共有し、岡崎市でセキレイがどんなところにいそうか地図を見て考える。 【期待する振り返り】 ・自分たちだけだと分からないことも多くの人に協力をお願いすると調べることができた。３種のセキレイがどんなところで見られるか分かってきたよ。生平以外はどうなっているのかな。	・まとめたことを共有し、セキレイと人との関わりについて考える。 【期待する振り返り】 ・ハクセキレイがなぜ市の鳥か調べていたら、岡崎市全体のセキレイの分布状況が変わってきていることや自分たち以外の人が鳥をどう思っているか分かってきたよ。３種類のセキレイを大事にしたいな。	・セキレイを通して、生平のよさを全校児童や学区の方、富士クラブさんに発表し、自分たちの思いや願いを伝える。 ・もっと多くの人にも知ってもらうためにどんなことをしたらいいか考え行動する。 【期待する振り返り】 ・３種のセキレイが見られる自然が豊かな生平を大切にしていきたい。

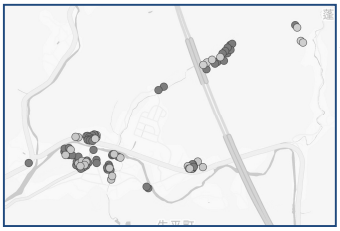
実践の様子Ⅰ（知る）

児童は、学校にいる間セキレイはどこにいるかという疑問をもった。そこで、昼間にセキレイを見かける可能性がある富士クラブの方々にセキレイの観察を協力してもらおうと考えた。児童は「セキレイマップのお願いをする会」を開き、学区にいるセキレイの種類やセキレイが見られる場所を示した『セキレイマップ』の協力をお願いした。

セキレイの見分け方を説明する児童

児童は３種類のセキレイの見分け方や聞き分け方について、写真を使ったり鳴き声を聞いてもらったりして説明することができた。

児童や富士クラブの方からの目撃情報を基に、教師は、googlemymap で月ごとにハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイのセキレイマップを作成した。児童は、月ごとにセキレイマップの分析を行い、セキレイの種類によって分布にどのような差があるのかを調べた。



セキレイマップ

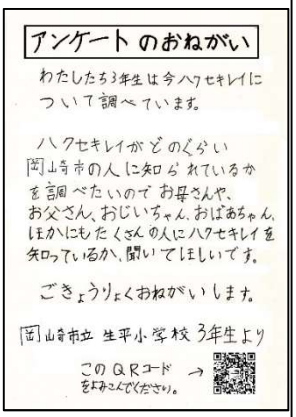
月ごと、セキレイの種類ごとに分布を比較することに加え、いろいろな月のセキレイマップをセキレイごとに重ねて表示したり、セキレイマップを縮小して広範囲で表示したりするなどいろいろな見方でセキレイマップからセキレイの特徴を読み取った。

ハクセキレイは川に近い場所や人がいる場所の方が多く、山の中であまり見られないこと、セグロセキレイは山の中にも人がいる場所にも見られること、キセキレイは数が少なく山の中の方が多く見られることなど、児童はセキレイごとに場所や範囲に特徴があることを見つけることができた。

実践の様子Ⅱ（調べ、考える）

ハクセキレイが岡崎市の鳥になっていることを知った児童は、ハクセキレイが市の鳥になった理由について調べる班、岡崎市でハクセキレイに関係のあるものを調べる班、ハクセキレイが市内のどこで見られるかを調べる班に分かれて、追究活動を行った。

市の鳥に決まった当時、ハクセキレイの群れが矢作橋に巣を作ってすんでいたことを知った児童は、「市の鳥になるくらいだから今でも市内のいろいろな場所にいるのではないか」「ハクセキレイのことを多くの市民が知っているのではないか」と考えた。



アンケートのおねがい

わたしたち3年生は今ハクセキレイについて調べています。

ハクセキレイがどのくらい岡山市の人に知られているかを調べたいのでお母さんや、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ほかにもたくさんの人にハクセキレイを知っているか、聞いてほしいです。

ごきょうりょくおねがいします。

岡山市立 生平小学校 3年生より

このQRコードをよみとってください。→

セキレイに関するアンケート

そこで、これらの疑問を解決するため、学区の人にハクセキレイに関するアンケートを取ろうと児童が提案した。「学区の人たちの中には富士クラブの人がいるし、今までにまとめ発表会を見に来たことがある人が多くいて、セキレイのことを知っている人が多いから、生平学区だけでは参考にならない」と児童は考えた。そこで、市内にいる親戚、習い事で知り合った人たちの家族など、いろいろな人にアンケートをお願いした。

２００人を超えるアンケートから、①生平学区以外の人でハクセキレイを知っている人は全体の３分の２程度、②ハクセキレイを見てもハクセキレイだと分からない人が全体の半分いる、③ハクセキレイが岡崎市の鳥であることを知らない人が全体の半数以上いる、などの結果が得られた。

この結果を見て児童は、市の鳥であるハクセキレイのことを知らない人が多いから、もっとたくさんの人に知ってもらいたいと考えた。

実践の様子Ⅲ（まとめ、広げる）

アンケートに応えてもらった人に結果を伝えたいと考えた児童たちから、ハクセキレイは市の鳥だからたくさんの市民に知ってほしいという意見が出た。そこで、ハクセキレイについて調べたことをまとめ、アンケートに応えてもらった人たちに見てもらおうということになった。

右の資料は、配付した『アンケート結果のお知らせ』である。結果の他に、岡崎市で見られるハクセキレイに関係のあるもの、よく見られる場所、見分け方などを載せて配布した。

アンケート結果のお知らせ

また、お世話になった富士クラブの方を招待して、セキレイ調査の結果を知らせ、１年間協力してもらったお礼をしようと児童は計画した。セキレイ調査の報告会では、３種類のセキレイを月ごとにまとめたセキレイマップと１年を通してセキレイマップから分かったことを中心に、セキレイの生態と、ハクセキレイのアンケート結果について発表した。

その後、感謝状とセキレイの折り紙を作って渡した。学区全域にわたるセキレイマップができたことに対し、感謝の気持ちを伝えることができた。

成果

学区のセキレイ調査を通して、日本で数が減少しているセグロセキレイが学区でいちばん多く見られることに気付くことができた。また、３種類のセキレイが見られるのは珍しい場所であることを知り、生平の自然の豊かさを感じることもできた。

セキレイマップにシールを貼る児童たち

タブレット端末を利用してセキレイマップを、月ごとやセキレイの種類ごとなど、いろいろな見方で表示することで、地形の特徴を踏まえてセキレイの行動の特徴を考えたり、季節によって行動が変化することを推測したりすることができた。

ハクセキレイについて調べる児童たち

セキレイ調査と並行して、市の鳥がハクセキレイである理由や市内にあるハクセキレイに関するものを調べる探究学習を行うことで、以前よりハクセキレイに興味をもつことができた。マンホールの投票の際にハクセキレイのデザインを選んで投票したり、消防署の見学で消防車にハクセキレイを見つけたりするなど、意識してセキレイを見るようになった。

また、富士クラブの方々や全校児童、教員、身の回りの人等、多くの人との交流をもったことにより、自分の言葉で思いを説明したり、発信したりすることができるようになった。

課題

月ごとのセキレイマップを比較してセキレイの特徴について考える際に、季節による温度の変化や地形の特徴など様々な要素があり、かなり時間がかかった。また、個体数の増減の推移を知るためには折れ線グラフが適しているが、３年生では学習しないため以前の月より増減しているという視点でとらえることが難しかった。市の鳥調べの探究学習も意欲的であったが、区切りの付け方や時間配分が難しかった。

４年の実践　主体的に追究するなかで、生物の共存について考え、行動する力を育む

総合的な学習の時間「ツバメとの共生」

子供の実態

・野鳥への興味関心が強く、愛鳥意識が高い。
・生物保護の思いはあるが、生物同士の関わりや人間との共生に対する考えまでにいたっていない。
・明るい子が多いが、一定のグループに固まりつつある現状がある。
・自分の考えを分かりやすく、書いたり、話したりすることが苦手な子供が多い。

教師の願い

ツバメの姿を追う中で、大きさが似通っているスズメとの共存について考え、自然豊かな生平を守りたいという心情を育てたい。

子供たちが野鳥を通して、学区の人や専門家と接する中で様々な思いに気付き、自分にできることを考え、表現させたい。

単元目標

①　野鳥の生態について考え、自ら課題を持ち、追究している。
②　野鳥の生息状況を理解し、生物の共存や人間との共生について深く考えている。
③　学区の方の思いを知り、自分ができることを考え、発信したり行動したりしている。

教材観

ツバメの営巣調査は何十年も前から行われているため、子供たちもツバメの営巣調査を受け継ぐ必要性を感じている。また、ここ数年の４年生からツバメの巣を守るために設置されているスズメアパートの清掃方法を学んでいるため、スズメに対しても関心が高い。そこでツバメとスズメを題材とし、営巣調査や観察をすることで、自然の厳しさや共存について様々な視点から考え、自分の意見を持ち、相手に自分の考えを伝える力をつけることができる。また子供が学区の方と直接関わる中で、野鳥に対して肯定的な意見、否定的な意見の真逆な意見がそれぞれの立場でもっていることを知り、人のことも環境のことも考えた行動をしたいと思う心が育つと考える。

指導観

子供のツバメとスズメに関わる活動の関心を高めるために、子供がやってみたい活動をツバメとスズメについて調べたり観察したりしながら見つけ、方法を考え、挑戦させたい。考えたり調べたりする活動では、子供たちだけで話し合いが進むように意図的にチームを作る。

営巣調査では、自分が調査をしている意識をもたせるために、一人一軒以上担当する。どの子も自信をもって学区の方への調査に行けるように、流れをチャート化した紙を持たせる。

ツバメが多く飛来している民家には、全員でたずねその理由や家主がツバメについてどういう思いをもっているかを知ることで、今後の活動の目安としていきたい。

目指す子供像

・野鳥の生態について課題をもち、主体的に追究していくことができる子供
・生物の共存や人間との共生について深く考えることができる子供
・よりよい自然環境であるために、自分ができることを考え、発信したり行動したりすることができる子供

「ツバメとの共生」
（総合的な学習の時間　３５時間　国語５時間、図画工作５時間　道徳１時間）

知る → 調べ、考える → まとめ、広げる

時期	４月～９月	９月～１月	２月～３月
探究の過程	学校や学区のツバメについて調べる（１５時間）	ツバメがすみやすい環境を考え、整備する（１３時間）	学習した内容を下学年や学区の方に伝え、次へつなげる（１８時間）
課題設定	・学校や学区のどんなところでツバメは子育てをしているのだろう。	・ツバメの個体数を増やすためにできることを考えよう。	・ツバメもスズメも守るために自分たちのできることは何だろうか考えよう。
情報収集	・ツバメの子育ての様子を実際に見ることで生態を知る。 ・ツバメの学校内の分布を調査する。 ・ツバメの学区の分布をアンケート調査する。 ・校外の巣を昼休みに調べる。	・先輩から巣箱について学ぶ。 ・図書資料やインターネットからツバメやスズメの巣や巣箱について調べる。	・来年もツバメが学校に来るように、スズメも巣に使わないようなコシアカツバメの古巣を撤去したり、スズメの巣箱の中を掃除したり、増やしたりする。
整理分析	・学区への分布アンケートを集計、整理する。 ・学校と学区の分布アンケートの比較をする。	・ツバメが多く飛来する学区の民家に全員で訪問し、その理由を考える。 ・ツバメの巣からコシアカツバメの巣に変わった民家に行き、過程を調べる。	・スズメがすみそうな場所を調べた結果から、設置する。
まとめ表現 振り返り	・ツバメにとって天敵であるスズメはどんな存在か考える。 ・ツバメとスズメに対し自分なりの願いをもち、新たな課題を見出す。 【期待する振り返り】 ・ツバメの個体数が減らないようにするために、スズメがコシアカツバメの巣を取らないようにしたい。	・自分たちで調べた実験を行い、新たな課題を見いだす。 ・スズメアパートを改良する。 【期待する振り返り】 ・下学年に引き継いでもらって、学校にも学区にももっとツバメが来るようになってほしい。	・ふるさと学習まとめ発表会で、ツバメとスズメの共生についての活動を全校子供や学区の方に発表し、自分たちの思いや願いを伝える。 ・活動を下学年に引き継ぎ、ツバメとスズメが共生できる環境が持続できるようにポスターを掲示する。 【期待する振り返り】 ・これからもツバメがたくさん来て、自然豊かな生平になってほしい。

実践の様子Ⅰ（知る）

子供たちは、４月当初から「今年はツバメを調べる」と意気揚々としていた。普段の会話からも「〇〇にツバメが来ている」「体育館にはコシアカツバメの巣ばっかり」などツバメを気にかけて生活していた。

５年生から「体育館周りの壊れている巣を取った方がいい」というアドバイスを受けて、壊れた巣を撤去し巣の中身を見ると、事前に調べていた通りの泥、枯れ草、羽毛で大部分を占めていた。しかし、菓子の袋紙といった人間が、捨てたものも入っていた。「ゴミがツバメに悪影響を与えているのでは」と、考える子供が多くいた。

ツバメの営巣調査　＿月＿＿日記入

※当てはまるものに〇をつけてください。今年のことでお答えください。

町名（　　）、協力者のお名前（　　様）

担当児童４年（　　）

①今年、巣を作ったのは、どちらのツバメがいくつ巣を作りましたか？

ツバメ（＿つ）　コシアカツバメ（＿つ）　その他（＿つ）

※ツバメとコシアカツバメのどちらも巣を作った場合は、以降の質問にツバメの場合は⑤、コシアカツバメの場合は⑥と記入してください。

②巣を作った場所は、どこで何階ですか。　軒下(のきした)

玄関外　車庫　ベランダ　寝室(軒下)　子供部屋(軒下)　リビング(軒下)

その他(　　)＿＿＿階

③巣を作った場所の向かい(正面)には、何がありますか？

川　住宅　木　畑　田んぼ　道路　その他(　　)

④巣を作った場所周辺は、人の通りが多い場所ですか、少ない場所ですか？

多い場所　　少ない場所

⑤巣にひなは、多いときに何羽いましたか？

1羽　2羽　3羽　4羽　5羽　その他(　　羽)

⑥ツバメのヒナの死体やたまごが落ちているところを見ましたか？

ない　ある（ヒナ　たまご　　）

⑦巣の近くでツバメの天敵(カラス、スズメ、ヘビなど)は見ましたか？

よく見かけた　　時々見かけた　　見かけなかった

⑦自宅をよくめで、生平学区ではツバメとコシアカツバメの巣はどちらが多く見かけますか？（生平小学校のは、コシアカツバメの方が多いです）

ツバメ　　コシアカツバメ

⑧巣の材料や巣の中に、どんなものがあるか知っていますか？

材　料(　　)

巣の中(　　)

⑨ツバメ、コシアカツバメ、スズメが仲良くしていたところを見たことはありますか？(近くでご覧をたべているようなところ)

ある（コシアカとツバメ　ツバメとスズメ　コシアカとスズメ）　ない

⑩巣立つ前の巣を人の手でこわしましたかまた、天敵にこわされましたか？

こわした　こわされた　こわしても、こわされてもない

⑪ツバメはいつ頃巣立ちましたか？　※まだいる、なら⑪をとばす

まだいる　巣立った ⇒ ＿＿月　上旬　中旬　下旬

⑫ツバメの巣は、今どうなっていますか？どうしましたか？

スズメの巣になった　人の手でこわした　自然にこわれた(こわれかけている)

そのまま　その他(　　)

⑬ツバメが巣を自宅に作ることをどう思いますか？

これでアンケートは終わりです。ご協力、ありがとうございました。生平小学校　4年生一同

営巣した家へのアンケート

学校には、コシアカツバメばかりでコシアカツバメの巣は入り口が狭いので、中の様子が分かりにくかった。そこで、隣のファミリーマートにお願いをし、ツバメの巣を昼休みに見学をさせてもらった。卵の増減に一喜一憂したり、親鳥が警戒して飛び回ったり、巣の真下に段ボールを敷いてフン対策をしたり、といったことを間近に見ることができ、ツバメの行動の一部を確認できた。そのような経験をふまえて、営巣調査のアンケートを考えた。その結果、知りたいことだけでなく、「生平に飛来するツバメが増えるためには」という願いを込めたアンケートを作成することができた。

巣の中を調べる子供

壊れた巣を撤去する子供

ツバメの巣を覗く子供

実践の様子Ⅱ（調べ、考える）

アンケート結果から、特徴のあった３軒と連絡を取り、全員で見学、質問する機会を設けた。訪問する前に周りの環境を確認し、環境に関する質問を考えた。次に、家主さんのツバメへの思いなど尋ねる質問も考えた。

【王さん宅　巣が９箇所】

巣が多い理由を探りたい、という思いで巣のある場所に注目した。家の壁に突起物が多い、壁に凹凸がはっきりある、軒下が長いといった特徴が巣を作るのによいのではないかと気付くことができた。また、家の周りも田んぼと畑に囲まれていて、えさを取りやすい環境なことにも気付いた。最後に、今年巣立った後に、ボーダーコリー犬が庭に住み始め、今後、ツバメとどう関係するのかという疑問が生まれ、来年度以降調べてほしい、と願う気持ちをもった。

作りやすい理由①②

作りやすい理由③

隣の巣との距離を実感

今後、ツバメと犬の関係が気になる思いをもつ子供

【金子さん(工場)　巣が１３箇所】

金子さんの話や工場内の至る所からの工夫を目にして「ツバメのために」という思いを全員が感じ取ることができた。いつでも巣を出入りできるように扉を閉めない、ツバメとスズメの特性を考えたしかけとして、くぎを出入口の上部に刺しておく。そうすることで、スズメや蛇などの天敵の侵入を防いでいる。また、換気扇に近づくことができないように、大きな鳥の模型を吊るしておく。これらの準備をすることで「ツバメが安心して飛来し、営巣し、巣立っているのでは」という感想をもった。大きな鳥を吊るす前に、換気扇で首がはねられた話を教わり、「家の換気扇に近づかない工夫がいる」と感じた子供もいた。

ツバメのための工夫①

ツバメのための工夫②

【鷲山さん　コシアカツバメの巣ができた】

学校では、コシアカツバメばかりを見るようになったので、学区にもコシアカツバメの方が多いのではないかと予想した。「アンケートにどちらを多く見るか」という問いを考えていたので、興味深く見学を行った。一度巣立った後に、巣の形の変化に気付いたと教わった２つを比較した話を聞いて、違いや共通点を学び取ることができた。また、巣立つ前のヒナが短い距離から跳ぶ練習をし、親鳥が見守っていた話を聞くとうれしそうな表情を子供が見せていた。

コシアカツバメとツバメの違いを聞く子供

ツバメからコシアカツバメの巣になり横に広がっている巣

実践の様子Ⅲ（まとめ、広げる）

まとめ発表会に向けて、共通なこととそれぞれの家の特色についてまとめて、まとめ発表会に臨んだ。また、ツバメとスズメがそれぞれが安心して暮らすためにスズメアパートを増やすべきだという結論になり、昨年より４か所増やし、全員で協力して設置した。

掃除したスズメアパートを設置する子供

成果と課題

学区には、「ツバメを大切にしている方がたくさんいる」ということを、全員で訪問することで実感できた。また、ツバメと人間、ツバメとスズメだけでなく、ツバメと犬との関係が今後、どうなっていくのかという疑問も芽生え、それを後輩に託したいという思いをもつことができた。しかし、学校に飛来するコシアカツバメのことをもっと丁寧に観察、調査することができるとさらによかった。今後は、民家のツバメと学校のコシアカツバメという比較研究も面白いと思う。

５年の実践　生平の自然環境に興味をもち、よりよい環境保全を考え行動する力を育む

総合的な学習の時間「守ろう！生平の町　～男川環境プロジェクト～」

子供の実態

・総合的な学習の時間が好きと答える子供が多い。
・野鳥のことが好きで、よく観察している。
・３年生でのセキレイマップ作り、４年生でのツバメの生態について考える活動などから、自分たちの身近なところで生物が自然の中で関わり合って生きていることに気付き、人間と生物との関係について目が向くようになっている。

教師の願い

学区の自然環境を後世に残すには、どうするべきか考えられるようになってほしい。自然環境を考えるときに、調査活動や体験活動をもとに、判断したり客観的に捉えたりできるようになってほしい。人間や生物、自然の立場など、多面的に物事を捉え、考えることができるようになってほしい。

単元目標

① 水辺の野鳥や河川の自然環境に親しみをもったり、守ろうとしたりしている。
② 生物にとって好ましい環境を調べ、男川の生態系維持や環境保全の方法を理解し考察する。
③ 探求したことをもとに、男川のよりよい環境保全について学区の人や男川流域の人に発信したり、自分ができることを行ったりする。

教材観

子供たちにとって、あこがれの鳥であるカワセミ・ヤマセミ・アカショウビンを愛鳥とし、見られた数の変化を追うことで、男川の環境の変化に目を向け、河川の環境保全について考えることができるだろう。また、男川の上流・中流（学区）・下流の様子を実際に観察や調査をして違いを比べたり、他地域の環境保全活動を調べたりすることで、生き物にとってすみやすい環境を保護することと人が生活するために治水することのバランスを、多面的に考えることができるだろう。

指導観

男川の愛鳥を中心とした野鳥の飛来調査を行う際は、現在の状況を調べるだけでなく、学区の人の話を聞くことで、以前の男川で観察できた野鳥の様子にも目を向けることができるようしたい。そして、野鳥の会のデータをもとに、過去の様子と近年の様子を比較することで、野鳥の飛来の様子に変化があることに気付かせたい。

次に、見られる野鳥が変化した理由を予想し、個別の課題で原因を探っていきたい。追究する中で、男川の上流・中流・下流の現地調査に行きたい。個別の課題に沿って、水質・水生昆虫・魚・野鳥・河岸・植物などの様子を調べることで、河川の場所によって環境に違いがあることに気付くだろう。また、違いの理由を考えることで、上流での生活の営みが下流に影響していることや河川の環境が海の環境に影響を及ぼすことに考えが広がっていくだろう。

さらに、生態系維持や環境保全について深めた考えを、学区内外へ発信できるようにしたい。男川流域の小学校へ出向いたり、自分たちが作ったホームページの記事を見てもらえるようにお願いしたりする活動を行う。作成する野鳥の環境指標から現状把握の大切さを伝えたり、調べた河川の環境保全の方法を伝えたりして、多くの人に思いや願いを発信できるようにしたい。

目指す子供像

・河川の生態系維持や環境保全について理解し、深く考えることができる子供。
・よりよい環境保全について発信したり、自分ができることを行ったりすることができる子供。

「守ろう！生平の町　～男川環境プロジェクト～」

（総合的な学習の時間　７０時間）

知る ➡ 調べ、考える ➡ まとめ、広げる

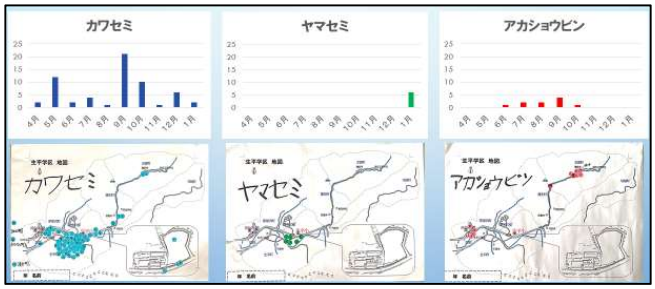
時期	４月～７月	９月～１２月	１月～３月
探究の過程	男川の環境を調べる（26 時間）	男川の環境の変化の原因と解決策を考える（36 時間）	男川の環境を守りたいことを学区や河川域に住んでいる人に伝える（18 時間）
課題設定	・カワセミ、ヤマセミ、アカショウビンはどこで見られるのだろう。	・10 年前と今では見られる野鳥が違うのはなぜだろう。	・川の環境を守るために、誰にどんなことを伝えたらよいだろう。
情報収集	・ターゲットバードの生態について調べる。 ・他学年や地域の人に聞く。 ・野鳥の会の観察記録から調べる。	・男川の上流・中流（生平）下流の生物（水生昆虫・魚・野鳥）や水質を調査する。 ・専門家の話を聞き環境の変化が生物に与える影響を知る。	・水辺の野鳥の環境指標を作成する。 ・どんな人が河川環境を守る活動をしているかを知る。
整理分析	・収集した情報を整理し、データ化する。 ・過去のデータと近年のデータを比較する。 ・アンケート調査から今年のターゲットバードの観察状況を地図にまとめる。	・生物調査や水質調査の結果から、野鳥にとってすみやすい男川にするためにはどうしたらいいか、環境の変化と野鳥の特性から考える。 ・自分たちでもできることは何かを考える。	・調べたことや自分たちの考えをどのようにして発信するかを話し合い、分担してまとめる。 ・自分たちの活動の成果と課題を整理する。
まとめ表現 振り返り	・男川でのターゲットバードの種類や数についてまとめ、男川の自然環境について新たな課題を見いだす。 【期待する振り返り】 ・以前は見られていたヤマセミやアカショウビンが今はほとんど見られていないのはどうしてか、調べてみたいな。	・男川の生物が増え、鳥が集まる環境にするためには、どんなことをする必要があるかをまとめ、発表する。 【期待する振り返り】 ・たくさんの野鳥が集まる男川にするためには、生態系の豊かさが必要だ。 ・男川の環境を守る方法を、多くの人に伝えたい。	・男川の環境保全について学区の人や他校の子に発表したり作った環境新聞を見てもらえるようにお願いしたりして思い願いを伝える。 ・一年の活動を振り返り、豊かな自然環境を創るために他にできそうなことを考える。 【期待する振り返り】 ・多くの人に男川の環境を守ろうと伝えることができたから、環境がだんだん良くなって、前みたいにたくさんの野鳥が見られるといいな。

実践の様子Ⅰ（知る）

子供たちは、ターゲットバードを見たい、生平に呼びたい思いはあるが、学区のどこでどのくらい見られているか知らなかった。そこで、これらの野鳥の学区で見られた数と場所を、全校のウォッチングカードから調べ、学区での飛来状況を知る活動を行った。

７月までの調査結果は、カワセミ 20 回、ヤマセミ０回、アカショウビン３回であった。児童Ａは、「セキレイよりずっと少ない。やっぱりレアだった。」と３年生時に調査したセキレイと比べて、数が少ないことに気付いた。また「やっぱり」の言葉から予想通りであったことが伺えた。児童Ｂは、母親が子供の頃作成したウォッチングカードを持参し、ヤマセミの記録や頻繁に出るカワセミの記録を発見し、「昔はもっと見れてたんだ。今はもういないのかな。」と昔と今の生平の様子と比べて考えた。この言葉から、学区の方や以前本校に勤務していた教員に聞き取りを行い、以前の生平では多数目撃されていたことを知り、ターゲットバードの飛来数が減少していることを確信した。子供たちは、グーグルマップで 10 年前と今の学校橋や御所戸橋の様子を見比べて、「以前はもっと木がいっぱいあったけれど、切られてしまっている」ことを見つけ、少なくなった原因を「自然がもっといっぱいあって、環境のいい上流に行ってしまったのではないか。」と考えた。そして「ここと上流ではどんな違いがあるか調べたい。」と新たな思いをもった。

ターゲットバードの学区調査を行うことで、感覚的に捉えていたターゲットバードの減少を、他の野鳥との比較、過去と現在との比較から事実に基づいて捉え、環境の変化を調べる活動へと広がった。そして、環境の違いを知る調査をしたいと新たな思いをもつことができた。



ターゲットバードの学区調査

実践の様子Ⅱ（調べ、考える）

ターゲットバードの減少の理由として子供たちが考えた水質、餌（魚や水生昆虫）、川周辺、ゴミ、天敵について、男川の上流、中流、下流の実地調査を行った。そして、その結果から、今の男川はターゲットバードにとってすみやすい環境かを話し合った。

調査結果から、上流が一番棲みやすそうだ、次に良さそうなのは中流で、下流はすみにくいと多くの子が考えた。しかし、東公園飼育員の「下流でもカワセミを見る。」との話から、カワセミが下流で見られる理由調べを行った。児童Ｂは「コンクリートでも営巣できるのか」を調べ、カワセミの都市適応化を知った。それに比べてヤマセミの営巣を調べた児童Ｂは河川開発により棲みかを追われ、数を減らしていることを知る。野鳥にも人の生活を利用する都市利用種、開発による環境の変化に対応してきた都市適応種、開発により棲みかを追われ減少の一途を辿る都市忌避種があることを知った子供たちは、岡崎に飛来する水鳥を、数の増減、営巣場所、餌などからこの３種に分類することにした。都市忌避種が圧倒的に多いことが分かり、「野鳥の観察を続けて今の状態を把握し、そのうえで川の自然を守っていく必要がある。」と結論付けた。

都市利用種	都市適応種	都市忌避種
	・カワセミ ・カワウ ・アオサギ ・ダイサギ ・バン ・トモエガモ ・ハクセキレイ	・ヤマセミ ・アカショウビン ・ケリ　・コチドリ ・オオヨシキリ ・ゴイサギ ・アマサギ・コサギ ・チュウサギ ・コアジサシ ・カワガラス ・カイツブリ ・ヒドリガモ ・カルガモ・マガモ ・オシドリ ・キンクロハジロ ・ホシハジロ ・オオバン ・キセキレイ ・セグロセキレイ

赤字は今年学区で見られた水鳥（ウォッチングカードより）

子供たちが考えた環境による分類

河川環境と野鳥の関係を調べることで、自然を守る意味について深く考えることができた。

実践の様子Ⅲ（まとめ、広げる）

野鳥を守るために自分達にできることをしたいと考えた子供たちは、男川のゴミ拾いを行った。この活動で自分達では拾いきれないほどのゴミがあることに驚き、多くの人に呼びかけて河川の環境を守っていきたいと考えた。そこで、竜谷小に出向き、同じように河川の学習をしている竜谷小の４年生と「川でつながる交流会」を行うことにした。

交流会で子供たちは次の３点を意識して自分たちの思いを伝えた。１つ目は、相手を意識し、自分達の実践を分かりやすく伝えることである。「相手は鳥のことを知らない４年生で、ターゲットバードとか、越冬地とか言われても分からないだろうから、原稿を改良した方がいい」「竜谷小の子の方を見て、もっとゆっくりはっきり話した方がいい」「スライドには鳥の名前だけでなく、写真も加えよう」と「ふるさと学習まとめ発表会」の発表から改良を加えて発表を行った。２つ目は、実物を持ち込み実際に見てもらうことである。「スライドを見るだけよりも、ぜったいに分かる。」とターゲットバードのマップ、男川の調査結果、拾ったゴミなどを展示し、実際に触ってもらったり、近くでじっくりと見てもらったりした。３つ目は、新聞を作成して配布をしたことである。「話を聞いただけだと、忘れてしまうこともあるから、後から読んで分かるものを渡そう。」「竜谷小に掲示をしてもらって、４年生以外の人にも伝えたい。」と楽しく読んでもらえるようにクイズや４コマ漫画を入れた「男川の水鳥新聞」を全員で作成し、竜谷小の子たちに手渡した。交流後の振り返りでは、「たくさん質問をしてくれてうれしかった。話を分かってくれたのだなと思った。」「新聞を喜んでくれてよかった。」「川を守りたい気持ちは同じだった。また一緒に活動したい。」と、思いを広げられたことに満足している姿があった。

展示したゴミを触る竜谷小の子供たち

新聞を手渡ししている様子

竜谷小との交流の機会をもったことで、環境保全の思いをどうやって伝えたらいいのかを相手を意識して真剣に考え、工夫をして発信することができた。そして、他校の取組から同じ思いを知り、活動をさらに広げていきたいという意欲も持たせることができた。

成果

単元の始めにターゲットバードの学区調査を行ったことで、感覚的に捉えていたターゲットバードの減少を、他の野鳥との比較、過去と現在との比較から事実に基づいて捉え、その事実から現在の環境をなんとかしたいという強い思いを育むことができた。探究活動では、河川の環境を野鳥の環境への適応から考える活動を行うことで、「野鳥の観察を続けて今の状態を把握し、そのうえで川の自然を守っていく必要がある。」と、自然を守る意味について深く考えることができた。そして子供たちの思いを他校へ発信する活動から、伝えるための効果的な工夫を考えて積極的に発信でき、一緒に自然を守っていく取組をしたいと環境保全活動を多くの人と行う意味を考えることができた。

課題

個の探究が深まるにつれ、新たな課題を子供たち自身で見出し追究を続ける姿があった。よって、区切りの付け方や時間配分が難しかった。各教科と連携した綿密なカリキュラムマネジメントを行うことで、子供たちがより主体的に追究し行動していけるように改善を図りたい。

６年の実践　学区の良さを多面的に発見し、主体的に行動する力を育む

総合的な学習の時間「NEW 探鳥会へ行こう！！～人も鳥も集まる美しい生平へ～」

子供の実態

・野鳥のことが好きでよく観察しているが、野鳥と地域の魅力をつなげて考えられる子供が少ない。
・他学年や教師と積極的に関わることができ、学校のためになることを考え、行動する活動を好む。
・探鳥会に家族や学区の人を呼びたいと言う子供しかおらず、学区外にまで目を向けることができない。

教師の願い

６年間学び続けた生平の恵まれた環境の魅力を再確認し、それを広めることで生平に人がやってくるきっかけや自然保護に関心を示す人が増えることに気付き、これからも生平学区の自然を守っていくために、生平学区の良さを主体的に校外に広めるようになってほしい。

単元目標

①　自分が案内したい人を想定し、参加者が楽しむことができるコースを作ろうとする。
②　今までのふるさと学習を振り返り、学区の良さを多面的にとらえることができる。
③　生平学区に対する愛着を深め、学区の良さを他の地域の人に進んで広げようとする。

教材観

生平学区は、山や川など自然あふれる学区である。恵まれた環境下で小学校生活を過ごしてきた子供らに生平学区の魅力を問うと、「自然」「たくさんの野鳥が見られる」など学区の魅力を感じられていることが伺える。また学区のふるさとカルタがあるほど、様々な名所もあり、バードウォッチングができなくても、十分魅力あふれる学区であるといえる。そんな魅力あふれる学区で育っている児童ならではの探鳥コースを作成し、それぞれが魅力を伝える探鳥会を行うことで、学区の良さを再認識できるだろう。また児童は、学区の良さを多面的に探すことで郷土愛を深め、自分の学区に誇りをもち、愛する学区の良さを広めるために行動できるだろう。

指導観

今までの学習を生かし、相手を楽しませることで学区の魅力を知ってもらったり、再認識してもらったりするコースを作ることを意識させる。野鳥のことが好きな人もそうでない人も学区の魅力を感じてもらうことを入り口として、野鳥観察の楽しさを感じ、野鳥を愛し、野鳥を守るために環境保全に意欲的になり、誰でも安全に参加ができるコースを目指すことを共通認識とする。そのために、専門家との関わりやアンケートを用い、様々な人の意見に耳を傾けることで、多面的にコースを考えさせる。また、ターゲットバードの見られた数や場所を示すことで、普段生平学区に住んでいない人にも安定して野鳥が見られることが伝わるように数値にもこだわらせる。ターゲットバードやコースは一人一つ考え、各々のこだわりがつまったコースを作成させることができる。一人でも作成できるように、友達と相談できる場や感想や疑問点、次回行いたいことを書く場を毎回設ける。一人一人のコースを通して、大好きな生平学区を守り続けていきたい思いがさらに育ってほしい。

目指す子供像

・生平学区の魅力を広めるためのコースや探鳥会を、主体的に考え、行動できる子供。
・多くの人と触れ合う中で、学区の魅力を再認識し、これからも学区の自然を守りたいと考える子供。

「NEW 探鳥会へ行こう！！　～人も鳥も集まる美しい生平へ～」
（総合的な学習の時間　７０時間）

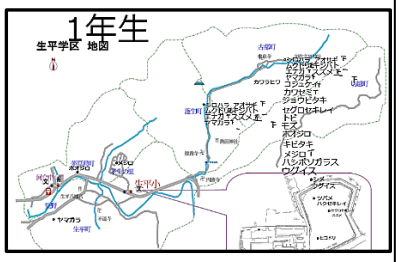
知る → 作り、行動する → まとめ、広げる

時期	４月～７月	９月～１月	２月、３月
探究の過程	今までの愛鳥活動を振り返り、どんなことができるか話し合う（20 時間）	学区の魅力が伝わる探鳥会コースを考え、探鳥会を行う（32 時間）	学区の魅力を学区外に発信する（18 時間）
課題設定	・学区の自然環境を多くの人に知ってもらうことはできないだろうか。	・生平の魅力が伝わるオリジナル探鳥会のコースを作り、案内しよう。	・６年間で見つけた生平学区の魅力を広めよう。
情報収集	・過去のウォッチングカードから、どの場所にどんな野鳥が見られたか調査する。 ・自分のターゲットバードを決め、その生態を調べる。 ・探鳥会を行う良さを野鳥の会の方に聞く。	・多くの学区の方や学区外の方も招くための宣伝を考える。 ・どんな人も楽しめるようなクイズや紹介文などを考える。 ・コースの整備をする。 ・野鳥の会の方をお招きし、第１回探鳥会を行う。	・今年のウォッチングカードから、今年どの場所にどんな野鳥が見られたか調査する。 ・探鳥会に来ていない人にも、生平の魅力を広める方法を調べる。
整理分析	・調査した結果を整理、比較し、ターゲットバードと学区の自然環境との関りを考える。 ・ターゲットバードを通して学区を知ってもらうためにできることを話し合う。	・第１回探鳥会に参加した人を対象にしたアンケートをとり、コースの改善をする。 ・全校児童にアンケートをとり、生平おすすめポイントについて収集する。	・いつ、誰でも探鳥会に行けるようにそれぞれの探鳥会コースや今年１年見られた野鳥をマップにまとめる。 ・自分たちの活動の成果と課題を整理する。
まとめ表現 振り返り	・自分のターゲットバードの生息環境を守るため、多くの人に学区の環境を知ってもらう活動を具体化する。 【期待する振り返り】 ・学区の自然環境をよりよくするために、自分達で考えた探鳥会を開催したい。誰にどんなことを伝えれば、学区の自然を守れるのだろう。	・学区内外の人に向けた生平の魅力が伝わる探鳥会を開く。 ・探鳥会に参加してもらった感想を集め、新たな課題を見いだす。 【期待する振り返り】 ・たくさんの人に、自分のお気に入りスポットや野鳥を紹介できて良かった。今回の探鳥会をきっかけに、たくさんの人が生平に来てくれたら嬉しい。	・作成したマップを校内掲示、学区への回覧、ホームページへ掲載し、生平の魅力を広める活動をする。 【期待する振り返り】 ・これからも自然豊かな生平にたくさんの人が来て、生平っていいな、すてきだなと感じてほしい。自分もそんなすてきな生平を、これからも大切にしていきたい。

実践の様子Ⅰ（知る）

生平の魅力や自分たちが今まで行ってきた自然保護活動を広げるために、探鳥会を行うことにした。野鳥がよく見られる探鳥コースを決めるために、自分たちの６年間分のウォッチングカードから、どこで、どんな野鳥を見ることができたのかを白地図にまとめ、自分のターゲットバードを決めることにした。スクールタクトを用いたことで、いつ、誰でも過去のデータを見られるようにした。

児童Ａは、自分のターゲットバードを毎年よく見られる野鳥にしようと考えた。探鳥会中にターゲットバードを見られる達成感を味わえば、参加した人たちが野鳥をさらに好きになると思ったためである。そこで児童Ａは、毎年よく見られ、飛翔時の翼の形がかっこいいと思っているカワウをターゲットバードとした。今年度までのウォッチングカードから情報を集め、よりカワウが見られる地域を探した。カワウが見られる回数からコースの候補地を２か所あげた。児童Ａは、自分がよく野鳥を見る場所ならばより正確にデータを収集できるだろうと考え、居住地区付近の探鳥コースを作り始めた。



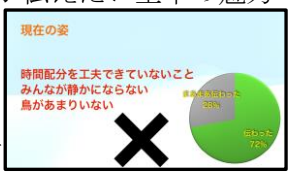
児童Ａの１年生のときのウォッチングカードをまとめたマップ

はじめに白地図にまとめたことにより、自分と友達のデータを見比べるようになった。また、最初に探鳥会を開く目的を全体で考えたことで、ターゲットバードやコースを決めるときに、自分の好みではなく今までの経験から、野鳥に関心のない方々がどうしたら野鳥を好きになるか考え、選択することができた。

実践の様子Ⅱ（つくり、考える）

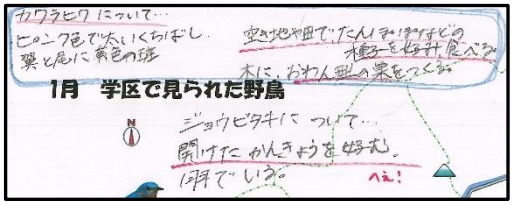
今回初めての試みとして６年生主催の探鳥会を、１１月１６日に実施した。安心して探鳥会に取り組める環境にするために、ペアを組み、常に相談相手がいる状態にして企画することにした。探鳥会の参加者に満足してもらうために、野鳥の会の方々を講師としてお招きし、６年生はコースの案内や探鳥会を楽しんでもらうための企画に徹することにした。

今回の探鳥会はペアの児童が考えたコースで行ったため、児童Ａはサポートに徹した。探鳥会を行ってみると、参加者が少なかったり、野鳥がよく見られなかったりと課題の多いものになった。児童Ａは今回の探鳥会の感想を「野鳥をじっくり観察できる時間が少なかったから、次は余裕をもって行けるコース作りをしたい」と書き、次回に向けての意欲を高めた。また最初から一貫して、野鳥を好きになるためには、実際に野鳥を見ることが大切だと捉えているのが伺えた。課題解決のため、大人の参加者を対象に、事後アンケートを実施した。児童Ａは、結果から自分たちが伝えたい生平の魅力が参加者に伝わっていないことに気付いた。そこで児童Ａは、国語の学習を利用して、自分たちの探鳥会の改善点をスライドにまとめ、発表した。児童Ａが感じた課題の「生平の魅力」が 28%の人に“まあまあ”しか伝わっていないことを円グラフにして取り上げ、クラスに探鳥会改善の必要性をアピールした。



児童Ａのチームが作成したスライドの一部

児童Ａは「生平の魅力を伝えるためにたくさんの人に野鳥を好きになってもらいたい。そのために自分たちが野鳥に詳しくなり、みんなに教えられるようになりたい」という考えをもった。その後、生息地や餌など野鳥に対する知識を以前よりもウォッチングカードに書きこむ姿が見られた。



児童Ａの１月のウォッチングカード（裏面）の一部

実践の様子Ⅲ（まとめ、広げる）

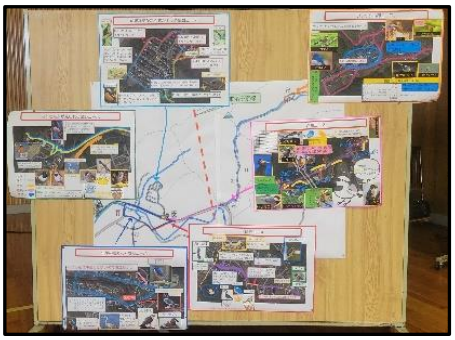
１月１６日に、２回目の探鳥会を実施した。今回はより自分たちが主催している意識をもたせるために、野鳥の会の方々を６年生の講師としてお招きし、探鳥会中の解説も全て６年生が行った。また前回の改善点から、後ろの人にも野鳥の名前やコースの情報が分かるように、探鳥会で歩くルートに野鳥の情報を入れたガイドマップ「探鳥マップ」を各チーム作成した。

児童Ａのチームが作成した探鳥マップ

児童Ａは、探鳥マップを作るとき根拠を意識して作成した。そこで、自分の６年間のウォッチングカードから、カワウが見られた数を表にし、掲載した。またカワウがよく見られる場所を黄色で示し、どのチームよりもターゲットバードを意識してマップを作成した。そしてそのコースで見られる野鳥の写真を載せることで、野鳥に詳しくない方でも自分で野鳥を見つけられると考え、野鳥を好きになるきっかけを工夫する姿が見られた。今回の探鳥会は当初の予定より多くの方々が参加をして下さった。探鳥マップを野鳥の会の方々に渡したところ、児童Ａがまとめたデータに感心して下さり、とても嬉しそうにしていた。クイズを前回より初心者向けにしたことで、多くの人が楽しそうに参加をしていた。野鳥の会の方々にも好評な探鳥会となり、児童らは達成感を味わうことができた。しかし、参加者は学区の人ばかりであった。探鳥会後の児童Ａは、生平の魅力を広めるために、もっとたくさんの人が探鳥会に参加をして、野鳥を見てほしい。そのために、このマップをもっとたくさんの人に見てほしいと考えた。そこで、学校のホームページや人がたくさん往来する場所に自分たちの探鳥マップを掲示したいと思い、どんな人が見ても分かるように学区地図と探鳥マップを合わせた生平探鳥マップを作成した。

児童Ａのチームの探鳥会

２度目の探鳥会を行ったことにより、子供たちは改善点から野鳥を好きになるために必要なことをより深く考え、行動することができた。また探鳥マップを作成したことで、学区や野鳥への自分の思いを具現化することができ、学区への愛着を深めることができた。


生平探鳥マップ

成果

まとめ発表会後、野鳥の会の方に話をしてもらう機会を設けた。そこで、探鳥マップを作成したことの価値や自然を守るために探鳥会を行ったことを認めてもらった。それに対し児童Ａは「中学生になっても、野鳥を守っていき、みんなに野鳥を好きになってほしい。自分たちの行動により、少しでも多くの人に野鳥のことを好きになってもらえたと思うと、嬉しく思う。これから先、ずっと野鳥や自然を大切にしていきたい」と、自然保護について前向きに捉えることができた。また地域の方々と交流することにより、自然を守ることについて自分の考えを広げ、行動することができた。

課題

作成したマップをたくさんの人が往来する場所に掲示することで、たくさんの人が生平に来て、今の生態系が崩れてしまうことを懸念した結果、探鳥マップを広めることに後ろ向きになってしまった。子供たちの思いと生平のくらしを守るための折衷案を考えていきたい。

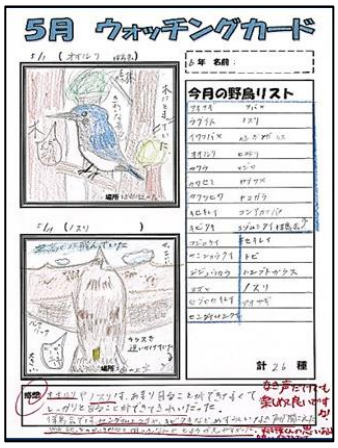
愛鳥委員会の実践　　愛鳥活動のリーダーとなり、活動を活性化させる

委員会活動「知る・守る・広げる・つなげる～野鳥がすみ続ける生平を目指して～」

実践の様子Ⅰ　「知る」活動

①ウォッチングカード

観察した野鳥はウォッチングカードにその姿や特徴などを記録し、蓄積することで、野鳥に対する関心が高まると考えている。本年度も、火曜日と金曜日の朝学習の時間１０分間をウォッチングカードをかく時間として位置づけ、全校で取り組んだ。今年度から、上学年のウォッチングカードを１ヶ月に１枚のものに変更した。表面は、見つけた鳥の種類や生態、特徴などを自由に書き込めるよう絵を描くスペースを広くとった。また、絵には表さないものの見つけた鳥の名前を記入する「今月の野鳥リスト」の欄も設けた。このことにより、１つの鳥をじっくりと細かい部分まで描くことができるようになり、鳥の特性が今まで以上に分かりやすくなった。そして、「リスト」を見ることで、季節ごとに集まる鳥もよく分かるようになった。裏面には、学区全体の地図を掲載し、見つけた鳥の名前を見つけた場所に書き込めるようにした。この地図を見合うことによって、今の季節には、どんな場所を鳥は好んで集まってくるのかが分かり、鳥をよく見ることができるポイントを把握することができるようになってきた。この取り組みによって、通学時や休日にも鳥の集まるポイントを通る際には、鳥の様子に関心を寄せる子供が増えてきた。



上学年の
ウォッチングカード

②探鳥会

縦割り親子探鳥会では、本年度も５月１日にいつもより１時間長いロング親子探鳥会を実施した。ゴールデンウィークの中日に設定したことで、大勢の保護者が参加してくれた。また、コースも普段行くことのできない学校東部のコースを設定したことで、オオルリやカワセミを見ることができた。愛鳥活動が４０年以上続いているため、子供のころ本校で愛鳥活動を行っていた保護者が、子供たちに鳴き声や見られた野鳥について教える場面も見られ、和気あいあいとした探鳥会になった。また、夏の探鳥会では、アオバズクが生息している痕跡を、冬の探鳥会ではハヤブサを見ることができ、探鳥会はどの回も大いに盛り上がった。

縦割り親子探鳥会

今年度は、学校の裏山にたくさんの野鳥が訪れた。サンコウチョウのオス、メス、ヒナの家族、ヒレンジャクの大群。めずらしい鳥が来ると、子供たちがお互いに連絡し合って、双眼鏡を持って集まってくる。各自がタブレットで撮影したベストショットを見せ合ったり、図鑑を持ってきて特徴を確認したりと、探鳥会で培ってきた力を普段の生活の中に取り入れている姿を多くみることができた。

「裏山に鳥が来た！」

ベストショットをねらう
子供たち

実践の様子Ⅱ　「守る」活動

③裏山の給餌活動・清掃活動

冬季の餌が少なくなる時期に、愛鳥委員会では給餌活動を行っている。今年度は、週に１、２回、４つの縦割り班ごとに、３週間にわたって行うことにした。少人数で取り組むことで、一人一人の責任感も増し、低学年の子供にも清掃活動への真剣さが今まで以上に感じられるようになった。また、自分の置いた餌がはっきりと分かるようになり、自分の置いた餌を鳥が食べている様子を見ることができ、ますます鳥への愛着が増したようだった。次の給餌活動までの数日間、給餌台に餌が置いてあることで、餌の減り具合もよく分かり、どんな場所に置くとよく食べてくれるのか、どの餌が好きなのかにも関心が向くようになった。今年度は、給餌期間が長かったためか、例年以上に多くの鳥が集まった。給餌活動期間が終わっても、自主的に活動をしている子供がいることから、この活動方法の変更が子供たちの意欲の高まりにつながったことを感じる。

裏山での清掃活動

裏山での給餌活動

④アルミ缶回収

１月１６日から１８日にアルミ缶回収を行い、その収益を給餌活動などの愛鳥活動費として役立てた。２学期末から昼の放送、お便り配付による呼びかけを行ったため、例年より多く回収をすることができた。

回収した大量のアルミ缶を紹介する様子

実践の様子Ⅲ　「広げる」活動

⑤愛知県野生生物保護実績発表大会

８月３日に行われた愛知県野生生物保護実績発表大会に、本年度も愛鳥委員が代表として参加した。発表では、野鳥がすみ続けられる自然豊かな生平を目指して横断的に系統的に学びを深めている「ふるさと学習」について、そして広い視野で未来を見据えた全校での愛鳥活動４つの『る』、「知る」「守る」「広げる」「つなげる」について発表した。その結果、愛知県教育委員会賞、文部科学大臣賞を受賞した。

愛知県野生生物保護実績発表大会

⑥愛鳥新聞・ホームページによる情報発信

今年も年３回の愛鳥新聞を発行し、実家庭への配付、学区への回覧を行った。読んでくださる人に楽しんでもらえるよう、活動報告に参加者の感想を入れたり、４コマ漫画や野鳥クイズを取り入れたり、と工夫しながら作成することができた。

年３回発行している愛鳥新聞

また、昨年度からの取り組みである、ホームページでのウォッチングカード紹介も継続し、今どんな野鳥が生平では見られるのかを紹介するようにした。学区のみならず、福岡や新潟、静岡など県外からの反応もあり、たくさんの人に広げられている実感を得ながら活動することができた。

ホームページによる情報発信

実践の様子Ⅳ　「つなげる」活動

⑦ふるさと学習テーマ発表会・ふるさと学習まとめ発表会・愛鳥宣言

どちらの発表会も愛鳥委員が司会進行を行った。そして、この会が学年間のつながる場であり、それぞれの学年がどんな活動をしようとしているのか、どんな成果があったのかを理解し合い、共に協力し合って活動を進める場になっていた。また、各学年の発表の他にも、愛鳥委員会として、全校で取り組みたい内容を発表したり、活動成果を発表したりした。愛鳥委員として、愛鳥活動を通して全校児童や地域の人など皆がつながり、よりよい生平を目指したいという思いを伝えることができた。さらに今年度は、まとめ発表会の最後に、学年ごとにこれからも大切にしていきたい思いを『愛鳥宣言』として発表した。この思いが来年度の活動へつながっていくことを願っている。

ふるさと学習テーマ発表会

愛鳥宣言２０２４

⑧愛鳥レクリエーション

全校のみんながもっと楽しく愛鳥活動に参加できるように、次の探鳥会のターゲットバードについて学べるクイズ大会や、野鳥の森での鳥探しゲームを行った。縦割り班で取り組むことで、上級生から下級生へと自然に鳥に関する知識が伝わっていっているのを目の前で見ることができ、愛鳥委員の子供たちは大いに満足した様子であった。

クイズ大会

⑨学校と地域をつなげる活動

１２月２日(土)のふれあい学習では、親子で野鳥の森探索を行った。長年にわたり子供たちのために学区の方が整備してくださった森が完成したのを記念して、愛鳥委員が企画した。今まで野鳥の森で行った様々な活動、楽しかった思い出、そしてこれから野鳥の森で行ってみたいことなどを発表し、どれだけこの森が自分たちにとって大切であるのかを学区の人に伝えることができた。保護者からも「素敵な森の中を歩くことができて楽しかった」と好評であった。子供たちの愛鳥活動を理解し支えてくださる地域の方の温かさを保護者と一緒に分かち合えた有意義な活動となった。

野鳥の森探索

成果

ウォッチングカードの取り組み方の工夫により、上学年の野鳥への興味関心が高まると同時に、より深い知識も身に付いていった。探鳥会や、学校の自然環境の整備を行ってくださる地域の方々との関わりから、４０年を超す愛鳥のバトンを確実に引き継いでいること、地域の人への感謝の心と温かいつながりが育まれていることを感じる。愛鳥宣言のように「つなげる」活動を大切にしていくことで、鳥が好きになり鳥を大切に思い自然を守っていこうとする意欲が高まってきている。

課題

児童数が年々減少している。愛鳥委員会が「つながり」をさらに意識し全校をリードすることで愛鳥活動がより活性化していくだろう。縦割り班での活動を増やして学年間のつながりを強化したり、愛鳥活動の先輩である地域の方と共に行う活動を大切にしたりして愛鳥活動を盛り上げていきたい。

８　成果と課題

（1）本年度の成果

昨年度の研究を振り返ると、次の３点において課題が見つかった。

課題１：各学年の目標について共通理解ができていない。そのため、学年の探究課題が作りにくくなり、子供にとって切実感のある追究になっていない。

課題２：昨年度から子供たちが課題について調べ、考える場面を大事にした「探究過程」を年間計画に位置付けているが、野鳥調査や環境整備の活動が中心になっている。

課題３：ふるさと学習に統一した単元構成の基本がないため、単元計画を作ることが難しい。

そこで、本年度は、次のような対策を講じた。

対策１：各学年の目標を明確化することで、子供にとって切実感のある追究課題を設定できるようにする。

対策２：２学期に～について考えるという探究過程を大事にした年間計画づくりに取り組む。

対策３：１学期に環境調査活動、２学期はそのデータや事実をもとにした探究活動、３学期はそのことについて行動・発信する。この３段階の学習の流れでどの学年も実践する。

１・２年生については、生活科９つの内容のうち（5）「身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動」を中心に、ふるさと学習として本校で取り組むことができる単元について、どの時期にどのタイミングで行うとよいかを考えた。そして、年間を通して行う活動と中心単元として取り組む活動を決めて計画的に実践した。1 年生は校内のお気に入りを、２年生は学区の人・もの・自然を、学級で１枚にまとめたマップを季節ごとに作った。子供たちは、友達の気付きから、自然や地域について興味の幅を広げた。また、２学期の中心単元の実践により、子供たちは、自分の興味関心があるもの、見つけてみたいものへ時間をかけてじっくりと追究し、気付きの質を深めることができた。

３～６年生については、昨年度作成した年間計画を改善して実践を進めた。まず、各学年のテーマと学年目標（ゴール）を明確化した。そして、それをもとに、教材として価値のあるターゲットバードを決定した。そして、年間計画の中でも、特に課題設定について、「期待する振り返り」に向けて、子供が課題解決していけるような学習課題になっているか検討を重ねた。１学期はどの学年もターゲットバードの調査活動を行い、図や表、グラフを活用して科学的にまとめたことで、結果から新たな思いをもつことができた。そして、子供にとって切実感のある探究課題となり、２学期には、一人一人が課題解決のために意欲的に調べたり、友達と交流したりすることで、視野を広げ、新たな考えをもち、さらに追究していく子供たちの姿があった。そして、３学期には、まとめ発表会で他学年や地域の人に伝えるだけでなく、５年生は他校へ、６年生は市へと社会的な発信をし、よりよい環境について考え、行動する姿が見られた。

本年度は、学校アンケート（児童）「総合的な学習の時間や生活科では、自分の課題や不思議に思ったことを追究しています。」のＡＢが、昨年度９１％から本年度９４％へと上がっていることからも、子供たち自身も課題解決に向けて追究できたことを実感できている。これらのことから、愛鳥活動を窓口にした環境総合カリキュラム（ふるさと学習）の取り組みを通して、ふるさと生平に愛着をもち、自ら進んで追究し、深く考え、主体的に行動できる子供を育むことができた。

（2）今後の課題

考えを深め合うような話し合いや整理･分析をもっと充実させることで探究の質を高めていくことができる。そのために、探究過程における整理・分析の授業の工夫や他教科と連携した探究過程のあり方などが、次年度の課題である。他教科と連携した綿密なカリキュラムマネジメントについても考えていきたい。

お　わ　り　に

『大さざんか　命受け継ぎ　永遠に』生平ふるさとカルタの中に、かつてふるさとの名木として指定されていた「生平小の大さざんか」が読まれた「札」があります。ふるさと学習まとめ発表会で、講評をいただいた学校評議員の河合美智代先生（第３４代校長）が、『さて、この大さざんかは、学校のどこにあったでしょう』とクイズを出されました。

この「大さざんか」は、現在の正門を入って、前方の体育館の南側にあったそうです。昭和５４年までは学校の正門が体育館の南側にあったので、当時の子供たちの登下校を優しく見守るシンボルでした。１１月から１２月にかけてピンク色の花が咲き、正門移転後も下方を通る道路からよく見えたそうです。大さざんかには、メジロがたくさんやってきて、花の蜜を吸っていました。この時期ミツバチはあまり飛ばないので、サザンカはメジロなどの小鳥たちに蜜をあげ、花粉を運んでもらい受粉する「鳥媒花」と呼ばれます。

樹勢が旺盛な頃の大さざんか（撮影：神谷）

大さざんかは、校地の変遷などにより、徐々に弱くなっていき、平成２５年に伐採されることになりました。この大さざんかの命を未来へつなごうと、当時の子供たちは、挿し木をしたり、中庭に移植したりしたそうです。このように「ふるさと生平」を守ろうとする学習は、脈々と続いています。学区で見られる野鳥をきちんと観察・調査すると、自然の変化を感じられます。その意味や理由を考えていくことで、野鳥と環境、人間の生活との関係が見えてきます。「ふるさと生平」の環境を守るために、この調べ、考えたことを大事にし、自然環境へ主体的に働きかけ、自分たちができる活動を続けていきたいと思います。

ここに、令和５年度「実践記録集『啐啄』第４７集」を発刊することができました。研究と実践を進めるにあたり、ご指導をいただきました諸先生方、子供たちの願いを受け止め、積極的に支援をしてくださった保護者や学区の皆様にお礼申し上げます。

※参考資料・文献ー「新　生平ふるさとカルタ　解説書」「ふるさとの名木と森・岡崎」

令和６年３月吉日

教頭　神谷　明良

研　究　同　人

尾崎　智佳	神谷　明良	前川あゆみ	成田　裕美	小林　葉子
鈴木　幸子	小久保優樹	横山　景一	杉本　智恵	中村さくら
水谷　真夢	岡　千晴	仁井本昇也	安藤　新一	岩月健太郎
野間口周子	三浦　裕昌	北村　絵美	山田　哲也	柴田　菜緒
下川　真弓	中村　裕美			

啐　啄（そったく）第４７集
発　行　令和６年３月吉日
編　集　岡崎市立生平小学校
代　表　尾崎　智佳